

W・S・モーム 作 宮川 誠 訳

『コンスタント・ワイフ——良妻に徹すれば——』

登場人物

コンスタンス・ミドルトン

ジョン・ミドルトン（外科医）

バーナード・カーサル

カルヴァー夫人

マリー・ルイーゼ

マーサ・カルヴァー

バーバラ・フォーセット

モーティマー（モーティマー）・ダラム

ベントリー（執事）

物語は、ハーリー通りのジョンの家で起こる。

第一幕

場面 コンスタンスの居間。とても趣味の良い部屋である。コンスタンスには装飾の才能があつて、この部屋も、ただ美しいだけでなく、居心地の良い雰囲気をもっている。
時間は午後。

カルヴァー夫人が散歩用の服装で独り座っている。初老の婦人で、愛嬌のある顔つき。ドアが開き、執事のベントリーがマーサ・カルヴァーの名を告げる。これはカルヴァー夫人の娘で、若く元気な独身女性。

ベントリー お嬢様です。（退場。）

マーサ （驚いて） 母さん！

カルヴァー夫人 （冷静に） そうですよ。

マーサ まさかここに來てるなんて。姉さんに会いに行くなんて言わなかったじゃない。

カルヴァー夫人 （上機嫌に） あたしもそんなつもりはなかったんだけど、——おまえのその団栗どんぐりみたいな目にコンスタンスに会いに行くって書いてなかったらね。そういうことなら先に行つてた

方がいいだろうって、そう思ったんです。

マーサ 姉さんは留守だった。

カルヴァー夫人 そうらしいね。……おまえ、待つ？

マーサ 勿論よ。

カルヴァー夫人 じゃあ、あたしも待つことにする。

マーサ そうしてくれればとつてもありがたいわ。

カルヴァー夫人 おまえ、言葉は丁寧だけど、心はこもってないね。

マーサ それ、どういうこと？

カルヴァー夫人 ねえ、あたしたち何年も一緒に暮らしてきたのよ。何年かは言わない方がいいくらい。

マーサ 言たってかまわないわよ。わたしは三十二。ちっとも恥ずかしいなんて思っていないもの。

姉さんは三十六。

カルヴァー夫人 なのに、まだ、あたしに嘘を吐きたがる。やっぱり女っていうのは小さな嘘が好きなんだ。

マーサ わたし、皆んなから率直だって褒められてるわ。

カルヴァー夫人 時には、率直だつて一つのポーズに過ぎないこともありますからね。考えることを隠すのに、率直さを装う以上に効果的なことある？

マーサ 母さん、今日は何だか、一々突っ掛かりたいみたいね。

カルヴァー夫人 あたしが？ とんでもない。おまえが今日は何が何でも自分が馬鹿に見えるように

しなくちや気が済まないんだなって、そう思ってるだけですよ。

マーサ わたしが姉さんに言うつもりでいるから？——姉さんも知っておいた方がいいことを。

カルヴァー夫人 やっぱり。思ってたとおりに。で、それって、おまえに婚約を破棄されて、咽を搔つ

切った男が三人いるってことよね？

マーサ そうよ。

カルヴァー夫人 一つ訊いてもいい？ 何故コンスタンスも知っておくべきだと思うの？

マーサ 何故、何故、何故。そういう質問って、実際は、何も答える必要がない質問なのよ。

カルヴァー夫人 あたしの経験から言えば、真面に答える必要のない質問って、本当は一番答えにくい質問なのよね。

マーサ 答えにくいなんて、全然そんなことない。姉さんが真実を知っておくべきなのは、それが真実だからよ。

カルヴァー夫人 勿論、真実つてのは素敵なものですよ。でも、それを話す前に、本当にそれが聴かされる人のためになるのか、単に自己満足のためにやってるんじゃないか、そこんことをよく考えてみる必要があるんじゃない？

マーサ 母さん、姉さんとはとつても不幸な人なんです。

カルヴァー夫人 馬鹿おっしやい。コンスタンスはよく食べ、よく眠り、綺麗なドレスを着てる。それに体重だつて減ってる。そんな女がどうして……、不幸のはずないでしょう。

マーサ 理解しようって気がないんなら、理解させようとしても無駄ね。母さんはいい人だけど、母親としては変よ、おかしいわ。その態度には呆れちゃう。

ドアが開き、ベントリーがバーバラ・フォーセットを案内してくる。フォーセット夫人はほつそりとした四十歳の女性で、物腰は実務的できばきしている。

ベントリー フォーセット夫人です。(退場。)

カルヴァー夫人 バーバラ、お久しぶり。

バーバラ (カルヴァー夫人に近寄り、頬にキスをする。) ベントリーが、コンスタンスは留守だけど、あなた方がここにいらつしやるって。ここで何を？

カルヴァー夫人 ちよつとした諍い。

バーバラ 原因は？

カルヴァー夫人 コンスタンス。

マーサ バーバラ、来てくれてありがとう。……あなた、ジョンがマリー・ルイズと浮気してるって知ってた？

バーバラ そういう率直な質問に率直に答えるのは大っ嫌いな。

マーサ 皆んな知ってるっていうのに。知らなかったのはわたしたちだけみたい。あなたいつから知ってた？ 噂じゃ、もう何ヶ月も前からみたいけど。どうして今までわたしたちの耳に届かな

かったのかしら。

カルヴァー夫人 (皮肉っぽく) 信頼できるお友達が今日まで隠してくれただってことは、人間そんなに捨てたもんじゃないってこと。

バーバラ そのお友達も今朝初めて聞いたのかも。

マーサ 初めは信じられなかった。

カルヴァー夫人 初めはね。でも、初めだけでしよう？ その後すぐ、おまえは怒り心頭。吃驚しちゃった。

マーサ だって、一足す一は二。最初はショックだったけど。何故もつと前に気づかなかったのか、そっちの方が驚き。

バーバラ カルヴァーさん、あなたも怒りをお感じに？

カルヴァー夫人 ちつとも。あたしは厳格な母親に育てられて、男っていうのは元々悪戯なものだっで教わってきましたからね、滅多なことじゃ驚かないし、腹も立たないの。

マーサ 母さんの言うこと聞いてると、気がおかしくなりそう。まるでどうでもいいことみたいに話すんだから。

カルヴァー夫人 コンスタンスがジョンと結婚して十五年。ジョンはとつてもいい人ですよ。あたしも時々、ジョンも大抵の男と同なじように浮気心を持つてるんじゃないかって疑ったことはあるけど、でも、そんなことはあたしには関係ないこと。くよくよ考えたことはありませんね。

マーサ いったい姉さんは母さんが生んだ子なの、それともそうじゃないの？

カルヴァー夫人 やれやれ、おまえは率直な質問とやらがよっぽど好きなようだね。コンスタンスはあたしが生んだ子ですよ。

マーサ なのに、そこにそうやって座ったまんま、姉さんが騙だまされるのを見て見ぬ風ふうをしようってわけ？ しかも、相手は姉さんの一番の親友なのよ。

カルヴァー夫人 コンスタンスが知らないでいるんなら、別にどうってことないんじゃない？ マリー・ルイーゼは可愛いわ、もちろん馬鹿ですけどね。でも、男って馬鹿で可愛い女が好きなんです。それに、どうせジョンが遊ぶんなら、あたたしちみんなが知ってる女ひとの方が何かと都合がいんじゃない？

マーサ そんな！ バーバラ、あなた聞いたことあって？——立派な社会的地位のある人が……、母さんには立派な……

カルヴァー夫人 (マーサの言葉を遮って) そう、立派なね。

マーサ そんなことを言うなんて。

バーバラ 何かしなくちやいけない、そう思うのね？

マーサ 思うんじゃないくて、決めたの、何かしなくちやいけないって。

カルヴァー夫人 でも、ねえ、おまえ、あたしが思うに、しちやいけないことが少なくとも一つある。

それは、このことをコンスタンスに話すこと。

バーバラ (少し驚いて) マーサ、あなた話すつもりなの？

マーサ 誰かが言うべきよ。母さんにその気がないんなら、わたしが言う。

バーバラ わたし、コンスタンスが大好きなの。何が起こってるのか、勿論ずっと知ってた。それでとっても心配してたの。

マーサ あいつのおかげで、姉さん、ひどい立場に立たされてる。こんな風に女を侮辱する権利はないはずよ。姉さん、馬鹿にされてるのよ。

カルヴァー夫人 旦那さんに浮気された女がみんな馬鹿になるんなら、世の中、きつと、もっと楽しいところになってるでしょうね。

バーバラ (話題を一つ提供できることがさも嬉しそうに) ねえ、知ってます？——あの二人、今日お昼を一緒だったんですよ。

マーサ それは初耳だけど、一昨日おとといの晩も一緒に食事をしたそうよ。

カルヴァー夫人 (陽気に) そのとき何を食べたかも知ってますよ。バーバラ、あなた、今日のお昼は何を注文したか知ってます？ 知ってたら教えてくれない？

マーサ 母さん！

カルヴァー夫人 マリー・ルイーゼならきつと、値が張るものを頼んだんじゃないかなって思うんだけど。

マーサ 母さんには慎みってものがないの？

カルヴァー夫人 あたしに向かって慎みなんて言わないでちょうだい。慎みなんて、ヴィクトリア女王様と一緒に亡くなったんです。

バーバラ (カルヴァー夫人に) でも、お母さんだって、ジョンがコンスタンスの一番の親友とおお

っぴらに遊び廻るのを良しとなさるわけじゃないでしょう？

カルヴァー夫人 歳のせいとか、このごろ血管が硬くなったみたいでね、あたし、男が女と戯れたがつても、目くじらが立たなくなっちゃったんですよ。男つてのはそんな風に生まれついてるんです。ジョンはお医者さんとしてよく働いてる。だから、時々可愛い女性をお昼に誘ったり、夕食と一緒にしたつていいじゃない？ ちつとも非難すべきことじゃない。週に七日、三度々々同じ相手と食事してたら、そりゃ飽きますよ。あたしだつて、御飯のとき向いの席にマーサの顔しか見えないのには、いささかうんざりしてるんですから。同じことの繰返しに飽き飽きするのは男も女も同なじじゃない？

マーサ 毎度々々お付き合いいただいて、感謝に堪えませんが、お母様。

バーバラ (意味ありげに) でも、あの二人は食事を一緒にしてるだけじゃないんですよ。

カルヴァー夫人 最悪のことを考えてるわけ？

バーバラ (勿体をつけて) 考えてるんじゃないくて、知ってるんです。

カルヴァー夫人 他人の醜聞ひとスキャンダルつて楽しいわよね。さてと、ドアは閉まつてる、盗み聞きしてる人は誰もいない、と。……ねえ、夫が優しく親切にしてくれてる分には、時々道を踏み外したからつて、そんなに非難することないんじゃない？——美徳の道つてのは狭く出来てますからね。

マーサ つまり、結婚の誓いなんて大して重要じゃない、守る必要なんてないつて言うわけ？

カルヴァー夫人 妻は守るべきですよ。

バーバラ 随分と不公平ですね。何故女だけ？

カルヴァー夫人 一般的に女はそうするのが好きだから、かな。あたしたち女は、夫に操みなとを立てること

とで自分は大いに称讃に値する者だと思つてる。本当はそんなこと取るに足らないことなのにね。女は元々操が堅いんですよ。浮気なんてものに特に興味はないんです。

バーバラ そうかしら。

カルヴァー夫人 ねえ、バーバラ、あなたは未亡人。しようと思えば何でも好きなことができる。あなた、これまでに、世間がやっちゃいけないつて言うことを、何が何でもやってみたいなつて思つたことある？

バーバラ わたしには仕事がありますから……。誰だつて、一日八時間働いた後じゃ、愛だ、恋だなんてものに煩わされたくないんじゃないやありません？ 仕事の疲れを癒いやすすんなら、ミュージカルか、トランプ。心からお慕い申し上げております、なんて言う男に傍そばにいてほしくはないでしょう。

マーサ とところで、仕事の方はうまくいつてる？

バーバラ トントン拍子。実は今日ここへ来たのも、コンスタンスと一緒にやらないかつて訊いてみようと思つたからなの。

カルヴァー夫人 何故コンスタンスが？ お金ならジョンが充分稼いでくれますよ。

バーバラ 最悪の事態になつても経済的な心配はないつて分かつてたら安心じゃないかなつて。

カルヴァー夫人 ああ、あなたも最悪の事態を期待してるつてわけね。

バーバラ そんなことありません。でも、このままの状態を続けるつてわけにはいかないでしょう？ これまでコンスタンスの耳に入らなかつたつてこと自体、奇跡だつたんです。そのうち必ず判つ

てしまう。

カルヴァー夫人 まあ、避けられないことでしょうね。

マーサ できるだけ早く判ってほしいわ。やっぱり義務として母さんが話すべきよ。

カルヴァー夫人 そのつもりはありませんね。

マーサ なら、わたしが話す。

カルヴァー夫人 それを許すつもりありませんね。

マーサ あいつは姉さんを侮辱してるのよ、耐えられないくらい。姉さん、立場がないじゃない。それにマリー・ルイズもマリー・ルイズよ。わたし、腹が立って言葉が見つからない。今度会ったら、思ってることをみんな言ってる。あなたは非道い、恩知らずの、軽蔑すべき女だって。バーバラ 何にしても、コンスタンスには慰めになると思うんです、——もし何かあったら、わたしを頼りにしてくれていいって分かってくれば。

カルヴァー夫人 でも、そうだったらジョンは慰謝料をはずむと思いますよ。とっても気前のいい人なんだから。

マーサ (怒って) そんなもの、姉さんが受け取ると思う？

バーバラ カルヴァーさん、マーサの言うとおりですよ。こんな状況じゃ、男から一ペニーだって受け取るわけにはいかないでしょう。

カルヴァー夫人 女はみんなそう言うんです、一応は。でも裏じゃ、できるだけ沢山慰謝料をもらえるように弁護士に頼んでおくものなんです。大抵の男は分かかってないけど、あたしたち女は、千

載一遇のチャンスを生かすことにはとても長けてる、お金なんて関心ないって風をしながらね。

バーバラ 皮肉な言い方ですね。

カルヴァー夫人 皮肉じゃありません、本当のこと。女だけの時ぐらい、本当のことを言ってもいいんじゃない？ 男のいるところじゃ、これは本当のあたしじゃないって自分でも充分わかっている姿をしていなくちゃならない。疲れるわ。だから、女だけの時ぐらいホントの姿で、くつろがなくっちゃ。

マーサ (断固たる調子で) わたしはこれまで自分じゃない姿を装ったことなんかないわ。

カルヴァー夫人 そうでしょうとも。でも、だからおまえはお馬鹿だって言うんです。かわいそうに、父さん似なのよ。コンスタンスは母さんの知恵を受け継いでる。

コンスタンスが入ってくる。三十六歳。目鼻立ちの整った美しい女性。外出から帰ったころで、帽子を被っている。

バーバラ (感情を込めて) コンスタンス。

コンスタンス 留守してごめんなさい。みんな待っていてくれるなんて、ありがとう。母さん、調子はどう？

彼女は一人ずつにキスをする。

マーサ 姉さん、今まで何してたの？

コンスタンス マリー・ルイズとお買い物。すぐ上がってくるわ。

バーバラ (少し狼狽して) ここに来てるの？

コンスタンス ええ。いま電話してるところ。

マーサ (皮肉っぽく) 姉さんとマリー・ルイズは、切っても切れない関係のようね。

コンスタンス とつても好人よ。一緒にいて楽しいわ。

マーサ お昼も一緒だったの？

コンスタンス いいえ。マリー・ルイズは彼氏と一緒に。

マーサ (カルヴァー夫人に目配せして) あら、そう。(陽気に、軽やかに) ところで義兄^{にい}さんは、

いつもお昼は家に戻って撰^とるんじゃないかった？

コンスタンス (腹藏なく) 午後のお仕事に余裕がある時にはね。

マーサ 今日は戻った？

コンスタンス いいえ。誰かと約束があるって。

マーサ どこで？

コンスタンス あら、知らないわ。あなたもわたしと同じくらい結婚生活を続けてれば解るんでしょ
うけど、亭主がどこへ行くのかは訊かない方が無難なの。

マーサ どうして？

コンスタンス (微笑んで) だって、そんなことしたら、今度は自分の方が訊かれる羽目になっちゃ

うじゃない。

カルヴァー夫人 それに賢い女なら、旦那さんを信頼するものですからね。

コンスタンス ジョンはこれまで一度だってわたしを不安な気持ちにさせたことないわ。

マーサ 運が好いこと。

コンスタンス (舌で頬を膨らませて、からかうように) それとも、賢いのかも。

マリー・ルイズが入ってくる。美しいドレスを纏^{まと}っている。大きな目をした可愛らしい女性。人に頼りたがるような態度が見られる。

マリー・ルイズ あら、パーティーだなんて知らなかった。

カルヴァー夫人 あたしもマーサもそろそろ帰ろうかと思ってたところ。

コンスタンス マリー・ルイズ、母は知ってるわよね？

マリー・ルイズ もちろん、存じ上げてますわ。

コンスタンス 好い母さんよ。

カルヴァー夫人 頭はちゃんとしたところにちゃんと付いてるし、歳の割には関節もがたついてはい
ませんよ。

マリー・ルイーゼはバーバラとマーサにキスをする。

マリー・ルイーゼ こんにちは。

マーサ (彼女のドレスを見ながら) 新しいドレス？

マリー・ルイーゼ ええ、今日初めて着てみたの。

マーサ 彼氏と一緒に昼を食べるから？

マリー・ルイーゼ 彼氏と一緒に、何故そう思うの？

マーサ 姉さんがそう言ったもの。

コンスタンス 単にわたしの推測。(マリー・ルイーゼに) だって、お店に入ってきた時、あなた、

目は輝いてるし、嬉しそうなの、すごく華やか(はな)い様子だった。あれは、誰かいい人に、あなたほど

魅力的な女性はいないって言ってもらった時の表情よ。

マーサ マリー・ルイーゼ、誰なの、教えて。

コンスタンス 教えちゃだめ。秘密にしておくの。そうすれば、わたしたちのゴシップの種が増える

じゃない。

バーバラ ところで、旦那様はお元気？

マリー・ルイーゼ ええ、とつても。いま電話したとこ。

バーバラ あなたの旦那様ほど奥様に夢中な人、見たことない。

マリー・ルイーゼ ええ、とつても優しいわ。

バーバラ でも、ちよつと不安になることない？ そんな献身的な愛情に四六時中(よんじく)応えていなくちゃ

ならないとしたら。神経が参(ま)つちやわない？ それに、本当は旦那様が考(かん)えてるような女じゃな

いって判(わ)つちやつたら、それこそ、大変なショックでしょう。

コンスタンス (魅力たつぷりに) でも、マリー・ルイーゼはまさに旦那様の考(かん)えてるとおりの人よ。

マリー・ルイーゼ それに、もしそうじゃなかったとしても、絶対確(た)実(じつ)な証(しやう)拠(きょ)がなきゃモーターは

納得(納得)しないでしょうね。

コンスタンス あら、あの音。ジョンだわ。(彼女はドアのところに行き、声を上げる。)ジョン！

ジョン！

ジョン (階下から) やあ。

コンスタンス 二階に来る？ マリー・ルイーゼが来てるの。

ジョン そう。じゃア、今行く。

コンスタンス 午後はずつと手術(しゆじゆ)だったの。疲(つか)れてると思うわ。

マーサ (マリー・ルイーゼを見て) きつとお昼はサンドイッチぐらいですませたんでしょね。

ジョンが入ってくる。長身(ながみ)でほつそりしている。だいたい四十歳(よんじゆうさい)くらい。

ジョン あれ、こんなに人がいるなんて！ お義母(かあ)さん、どうです？——調子(ていし)は。

カルヴァー夫人 “お義母(かあ)さん” ぼくやってますよ。

ジョン (カルヴァー夫人にキスをして、バーバラに向かつて) 知ってる?——お義母さんが結婚の申込みを受けてくれなかったから、ぼくは仕方なしにコンスタンスと結婚したんだ。

カルヴァー夫人 あたしもあの頃は若かったから、二十も年下の男性と結婚するなんて考えられなかったんです。

コンスタンス 以来二人はおおっぴらに戯れ合ってるの。わたしが焼餅やきだしたら、大変だったわ。

ジョン コンスタンス、今日は何してたの?

コンスタンス マリー・ルイズとお買い物。

ジョン (マリー・ルイズと握手をして) こんにちは。お昼はコンスタンスと一緒に?

マーサ いいえ。マリー・ルイズは彼氏と一緒にだったのよ。

ジョン その彼氏とやらがぼくだったら有難かったな。(マリー・ルイズに) 最近調子はどう?—

—随分とお久しぶりだけど。

マリー・ルイズ ジョン、あなたはいつもお仕事でしょ。コンスタンスとは毎日のように会ってるのよ。

ジョン お金持のご亭主は?

マリー・ルイズ いま電話で話したとこ。今夜は仕事でバーミンガムに行かなくちゃならないって言った、ホント、つまらないわ。

コンスタンス じゃあ、わが家で一緒に夕食ってことにしましょうよ。

マリー・ルイズ ホント? うれしい。でも、今日は疲れたから、有り合せのもので済ませて、早

く寝ることにする。

ジョン そうだ、コンスタンス、言おうと思ってたんだけど、実は今夜、急に手術が入ってね、盲腸の手術なんだ。

コンスタンス まあ。大変ね。ご苦労様。

マーサ 好いお仕事よね、お医者様って。何かしたくなったり、どこかへ行きたくなったら、手術が入ったって言えばいいんだから。誰もそれが嘘かどうか証明できないし、……。

コンスタンス マーサ、そんな疑いの種を蒔くようなこと言わないの。まあ、ジョンなら、そんなこと聞いても、じゃあひとつ騙してみようか、なんて気にはならないでしょうけど。(ジョンに) でしょ、あなた?

ジョン きみを騙すには、まだまだ修行が足りないと思うな。

コンスタンス (微笑んで) あら、たまにはいいこと言うじゃない。

マリー・ルイズ あなたたちほどお互い献身的なご夫婦、見たことない。羨ましい。結婚して十五年でしょ?

ジョン ええ。でも、まだ結婚したてみたいなんです。

マリー・ルイズ さあ、急いで帰らなくちゃ。もうこんな時間。じゃあ、コンスタンス、さよなら。

さようなら、カルヴァー夫人。

コンスタンス さよなら。今日は楽しかったわ。

マリー・ルイズ (ジョンに手を差し出して) さようなら。

ジョン あつ、そうだ。下まで送りますよ。

マーサ わたしも帰ろうと思つてたの。マリー・ルイズ、わたしも一緒に行くわ。

マリー・ルイズ (平常心を保つて) ジョン、ちよつと膝の具合を診てくださらない? ここ二、

三日とっても痛むの。

ジョン いいですよ。じゃあ、診察室の方へ。膝つてのは一旦調子がおかしくなるとなかなか厄介ですからね。

マーサ (断固たる調子で) じゃあ、わたしは待ってる。長くは掛からないでしょ? 一緒にタクシ
ーで帰れば安上りなもの。

マリー・ルイズ あたし、自分の車で来たの。

マーサ なお有難いわ。乗せてってくれるでしょ?

マリー・ルイズ もちろん、喜んで。

ジョンがマリー・ルイズのためにドアを開ける。マリー・ルイズに続いてジョンが出て行く。コンスタンスは冷静に、しかし注意深くこの遣り取りを眺めている。

マーサ 膝がどうしたつていうの。

コンスタンス 関節が滑るんだつて。

マーサ 関節が滑るとどうなるの。

コンスタンス 彼女も滑つて転んじやうでしょう。

マーサ 姉さん、焼餅やかないの? 義兄にいさんが診察室で女の人と二人きりになるつてことに。

コンスタンス その女が何か変なことを始めそうになったら、あの人、看護婦さんと呼ばいいわけ
でしょ?

マーサ (愛想よく) 今、看護婦さんはいて?

コンスタンス それに、あんな菓の臭いがプンプンする部屋で男に言い寄ろうなんて女は、どうせ趣
味の悪い下着を着けるに決まつてる。そんな女に焼餅をやく気にはならないでしょう。

マーサ このあいだマリー・ルイズにシュミーズを二枚貸してもらつた。洒落たデザインだから真
似したらつて。

コンスタンス あら、あのアイリッシュ・レースの入つた、サクランボ色の? あれは素敵だつた。
わたしも真似して一つ作つたのよ。

バーバラ マリー・ルイズつて本当に可愛いわよね。

コンスタンス とつても魅力的な人よ。でもジョンとは付き合いが長すぎるわ。もちろんジョンもあの
人は好きだけど、でも、頭は悪いつて言つてる。

マーサ でも、男は必ずしも本当のこと言うわけじゃないでしょ?

コンスタンス 有難いことにね。それとも……、わたしたち女は、男が何を考へてるのか知らない方
がいいのかも。

マーサ 義兄にいさん何か隠し事があると思う?

コンスタンス それは間違いないわね。でも賢明な女なら、夫が隠したがっていることには、当然知らん振りしてるわ——些細なことならね。それが結婚生活の基本的なルール、エチケツト。

マーサ 男はみんなベテン師だってことは忘れない方がいいと思うんだけど。

コンスタンス マーサ、あなただったら、もう一生独身で過ごそうって決めたみたいね。騙されたくない女が騙されたことなんて、これまであった？ 男は理解しがたいなんて、あなた本当に思うう？ 男は子供なの。ねえ、マーサ、ジョンは四十よんじゅうだけど、トロイのヘレンが十四じゅうよんだった時よりよっぽど子供。(注¹)

バーバラ お嬢さんは元氣？

コンスタンス ええ、おかげさまで。学校も寮も氣に入ってるみたい。…あの人たちは小っちゃな子供みたいなもの——男のことよ。腕白で、時々こっちも腹を立てたような顔をしてあげなくちゃならない。つまらないことを大袈裟に考えて、可愛くなっちゃう。だけど、本当は一人じや何にもできないのよね。あなた、病氣の男の看病したことある？ そりゃア、胸が締めつけられる思いよ。まるで、犬か馬みたいなんですもの。雨に濡れたくなかったら家に入ればいいのに、かわいそうに、そうするだけの分別もない。男にも魅力的な点はあるわ、でも大抵は頓馬どんばなのね。可愛くて、善良で、お馬鹿で、退屈で、自分勝手。好きにならずにいられない。あんまりにも無邪気で単純なんだもの。何の策略も持ってないし、屈折したところもない。可愛い動物。だけど、真面まじめに扱うのは馬鹿げてる。母さんはどう思ってる？ 賢い女性として。

カルヴァー夫人 コンスタンス、おまえはジョンを愛していないね。

コンスタンス そんなことないわ。

ジョンが入ってくる。

ジョン マーサ、マリー・ルイズが下で待ってるよ。(コンスタンスに) 膝に包帯を巻いといた。

コンスタンス 荒っぽくしなかったでしょうね。

マーサ (コンスタンスに) じゃあ、さようなら。母さんも来る？

カルヴァー夫人 もうちよつとここにいる。

マーサ バーバラ、さよなら。

マーサとジョンは出て行く。

バーバラ コンスタンス、一つ提案があるんだけど。わたし、いま仕事がとても順調にあって、一人じゃまかないきれないの。そこで、あなたに手伝ってもらえないかなって…？

コンスタンス でも、わたし、仕事には向いてないから。

バーバラ あなたの趣味の良さは最高よ。それに、創造性もあるし。裝飾の方は全部あなたに任せて、わたしは家具の売り買いだけに専念しようかなって。

コンスタンス でも、わたしには資本がないわ。

バーバラ わたしが充分持つてるから心配しないで。助けが必要な。あなた以上に適任の人はないわ。どう？——五分五分の権利ってことで。年に千から千五百ポンドは約束する。

コンスタンス わたし、長いこと怠け者の生活をしてきたから、一日八時間働くなんてとてもできそうにない。

バーバラ 考えておいてくれない？ ねえ、面白いわよ。あなたは本当は精力的な人なの。この先一生何もしないなんて、きつと退屈しちゃうわよ。

コンスタンス ジョンが嫌がると思うの。だって、妻を養う能力がないみたいに思われちゃうじゃない。

バーバラ 今時そんなことないわよ。女が男と同じように仕事をしたからって、誰も何も言わないわ。コンスタンス わたしの仕事はジョンの面倒を見ること。あの人に代わってこの家を取り仕切って、

あの人のお友達をもてなして……、要するに、ジョンが寛^{くろ}げて、仕合せだなんて感じられるような家にしておくこと。

バーバラ でも、あなた、思わない？——持つてる卵を一つ残らず全部^{ぜんぶ}一つの籠に仕舞っておくのは危険だって。だって万一あなたのその仕事がなくなっちゃったら……。

コンスタンス 万一つて？

バーバラ まあ、そんなことないとは思うけど、でも男って——ねえ分かるでしょ——気が変わりやすくて、当てにならないものよ。人に頼らなくても生きていけるっていうのは好いことだわ。経済的に独立した女は未来を自信を持って眺められる。

コンスタンス 有難いお話だけど、でも、わたしたち仕合せに暮らしてますから……、ジョンが気を悪くするようなことをするのは賢明じゃないと思う。

バーバラ もちろん今すぐってわけじゃないの。でも将来何が起こるか判らないでしょ。もし気が変わったら、仕事はいつでもあるってことは憶えておいて。室内装飾にかけちゃ、あなたほどの才能を持った人は絶対見つからないもの。その気になったら、そう言って。

コンスタンス バーバラ、あなたって本当に善^いい人ね。またとないお話だわ。感謝に堪えません。でも、こう言ったからって気を悪くしないでね、——そのお話を受ける必要が生まれることは絶対にありません、わたし、そう信じてる。

バーバラ ええ、分かってる。じゃあ、帰るわ。さよなら。
コンスタンス さようなら。

二人はキスをし、バーバラは出て行く。コンスタンスは呼^よ鈴を鳴らす。

カルヴァー夫人 コンスタンス、おまえ幸せ？

コンスタンス ええ、とつても。そう見えなくて？

カルヴァー夫人 充分幸せそうに見えますよ。その顔つきから判断する限り、何も面倒なことはなさそう。

コンスタンス 母さん、実はそうじゃないの。わが家のコックが暇をくれって言ってるの。あんなに

美味しいメレンゲを焼いてくれるコックはいなかったのに。

カルヴァー夫人 あたしはジョンが好きですよ。

コンスタンス わたしもよ。良き夫として備えているべき性質はすべて備えてるわ。いつも上機嫌だし、ユーモアのセンスはあるし、浪費癖とは全く無縁だし。

カルヴァー夫人 そのとおりよ、コンスタンス。夫にはそうした性質が一番大切なんです。そのところが分かってればいいの。

コンスタンス 良き夫としての条件は、決して七つの美德を備えていることじゃない、百の優しさと百の気立ての良さを持つてることだわ。(注2)

カルヴァー夫人 それに勿論だけど、人生には妥協も必要ですよ。自分の置かれた状況があるがままに受け入れて、それを最大限活かすこと。他人に期待しすぎちゃいけない。自分なりの幸せが欲しかったら、他の人にもその人なりの幸せを許してあげること。あれが欲しい、これが欲しい、でも手に入らない、——そんな時は、そんなもの無しで済まそうって心を決めるのが賢明つてもなんです。大切なのは、虚栄心に負けて分別を失わないこと。

コンスタンス 母さん、どうしちゃったの？ しつかりして。

カルヴァー夫人 近頃、賢い人間が増えすぎて、何でも分かっているようなことを言うけれど、一番当り前のことが分かってない。だから最近じゃ、独創的で、面白いお婆さんだつて思われたかつたら、当り前のことを当り前に言えればいいのよ。

コンスタンス 母さん、わたしをその人たちと一緒にしないで。

カルヴァー夫人 (優しく愛情を込めて) もし何かあったら、いつでも母さんに相談しなさい、ね、

いい？

コンスタンス もちろんよ。

カルヴァー夫人 もし仮にだけど、おまえが不幸になったとして、変な虚栄心からあたしに相談できなくて、慰めてやることも、忠告を与えてやることもできなかつたら、とても辛いことですからね。

コンスタンス (感情を込めて) そんなことには絶対ならないから。

カルヴァー夫人 この間こんなことがあった。ある女があたしのところに相談に来て、この頃旦那様から無視されてるって言うの。で、あたしが、何故お母さんのところに行かないであたしのところに来たのって訊くと、母は元々この結婚には反対だったから、今更自分が間違つてたなんて言えない、みっともないって、そう言うの。

コンスタンス 母さん、ジョンはわたしを無視したりしないわ。

カルヴァー夫人 そこで、あたしはその女をきつく叱つてやった。ホントは慰めてもらいたかつたんだらうけど。

コンスタンス (微笑んで) 母さんは優しいとは言えないわね。

カルヴァー夫人 結婚に関しては、あたしにはあたしなりの考えがあるの。もし夫に無視されるようなら、越度は妻の側にある。もし夫が計画的に不貞をはたらくようなら、非難されるべきは、十中八九、妻の方なんです。

コンスタンス (再び呼鈴を鳴らして) 「計画的に」って嫌な言葉ね。

カルヴァー夫人 分別のある女なら、夫が時々道を踏み外したからって目くじら立てたりしない。男
って、チャンスがあるとついそうしてみたくなる動物なんです。

コンスタンス それって男の虚栄心かしら？

カルヴァー夫人 あたし、その女に言っちゃった、——もし旦那さんが他の女に目移りするようなら、
それはあなたよりその女の方が魅力的だからだ。だから腹を立てたってしょうがない、今や
るべきはその女より魅力的な女になることだ。

コンスタンス 母さんはどう考えてもフェミニストとは呼べないわね。

カルヴァー夫人 ねえ、コンスタンス、貞節って一体何だと思う？

コンスタンス 母さん、窓を開けてもいい？

カルヴァー夫人 もう開けてますよ。

コンスタンス じゃあ、閉めてもいい？ 母さんくらいの齢の人からそういう質問をされたら、何か
象徴的な行動をとらなくちゃいけないような気がする。

カルヴァー夫人 馬鹿なこと言わないの。あたしは、貞節というのは女にとって大切なものだと思う
てますよ。そのことに疑いを挟んだ人はこれまで誰もいない。でも、男は違うのよ。女はね、家
庭とか、自分の立場とか、親類とか、世間体とか、そういうことを考えておかなくちゃ
ならない。だから、見ないでおく方が賢明なものが見えそうな時には目を閉じておくという知
恵を身につけるべきなの。

ベントリーが入ってくる。

ベントリー お呼びになりましたか、奥様。

コンスタンス ええ。バーナード・カーサルという方がお見えになることになってるの。他の人が来

たら、わたしは留守だと言ってちょうだい。

ベントリー かしこまりました、奥様。

コンスタンス 旦那様は家にいらっしゃる？

ベントリー はい、奥様、診察室の方に。

コンスタンス そう。もういいわ、下がって。

ベントリーは出て行く。

カルヴァー夫人 そろそろ帰って、遠回しに言ってるわけね？

コンスタンス そんなことない。それどころか、ぜひ残っててもらいたい。

カルヴァー夫人 その聞いたことのない紳士は何者なの？

コンスタンス 母さん、憶えてない？ バーナードよ。

カルヴァー夫人 何も思い当たらないね。まさか、セントバーナードじゃないだろうし。

コンスタンス 冗談はやめてよ、母さん、憶えてるはずよ。わたしにプロポーズしたバーナード・カーサル。

カルヴァー夫人 ねえ、コンスタンス、おまえにプロポーズした男の名前を全部憶えてるなんて、そんなことできるわけじゃないでしょう。

コンスタンス ええ、でもバーナードは何度も何度もプロポーズしたのよ、誰よりも数多く。カルヴァー夫人 何故？

コンスタンス そのたびにわたしが断ったから。他に理由は思いつかない。

カルヴァー夫人 印象にないねエ。

コンスタンス バーナードは母さんに殊更印象を与えようとはしなかったから。

カルヴァー夫人 どんな男だったわけ？

コンスタンス 背が高かったわ。

カルヴァー夫人 みんな背は高かった。

コンスタンス 髪は茶色で、目も茶色。

カルヴァー夫人 みんな髪も目も茶色だったと思うけど。

コンスタンス ダンスがそれは上手だったわ。

カルヴァー夫人 みんなダンスは上手だった。

コンスタンス もうちよつとで結婚するところまで行ったのよ。

カルヴァー夫人 どうして止よめたの？

コンスタンス だって、バーナードって、床に平伏ひれふして、どうぞわたしを踏みつけてくださいってイブの人だったんですもの。

カルヴァー夫人 要するにユーモアのセンスがなかったってこと？

コンスタンス わたしを愛してたことは確かだわ。ジョンがわたしを本当に愛してたかどうかは確信なかったけど。

カルヴァー夫人 で、今は？ ジョンはおまえを愛してらって確信があるわけね。

コンスタンス ええ、ジョンはわたしが大好きよ。

カルヴァー夫人 それで、その若い紳士は何のために今日ここに来るの？

コンスタンス もう若くはないわ。あの時二十九だったんだから、今はもう四十五のはず。

カルヴァー夫人 今でもまだおまえに恋してるなんてことはないでしょうね？

コンスタンス 有り得ないわよ。だって、そうでしょ？——十五年も前のことなんだから。母さん、

そんな顔で見ないで。嫌な顔。

カルヴァー夫人 誤魔化さなくなっちゃっていいんですよ。おまえはその男が今でもおまえに恋してるかどうか分かってる。

コンスタンス でも、結婚してから一度も会ってないのよ。日本で暮らしてるの。確か神戸で商売をしてるとか。戦争中に休暇で一度戻ってきたけど、あの時わたし病気だったでしょ、会ってないの。

カルヴァー夫人 そう。なら何故今日ここに来るの？ 手紙の遣り取りでもしてたの？

コンスタンス いいえ。十五年も会ってない人と手紙の遣り取りするなんて有り得ないわ。ただ、誕生日にいつも花を贈ってくれるの。

カルヴァー夫人 優しいこと。

コンスタンス で、この間手紙が来て、今イギリスにいるから会いたいって。それで、今日来てもらうことにしたの。

カルヴァー夫人 どうしてどうして、おまえもなかなかだね。

コンスタンス もちろん今は前とはすっかり変わってると思う。男の人って老けるのが早いから。つるつ禿禿で、ぶくぶくに太ってるかも。

カルヴァー夫人 それに、結婚してるかも。

コンスタンス それは無いと思う。だって、もしそうなら、わたしに会いに来てよなんて思わないんじゃない？

カルヴァー夫人 なるほど、その紳士はまだおまえに恋してる、って思ってるわけだ？

コンスタンス それは無いわ。

カルヴァー夫人 じゃあ、何故そんなに緊張してるの？

コンスタンス だって、当然でしょう？——わたし、バーナードに、老けたなあ、裏うられたなあって思われたくないんですもの。あの頃あの人、わたしに夢中だった。きつと今でもあの頃のままだと思ってる。だから、この部屋に入ったとたん、呆あ気にとられたような顔をされたら、あんまり気分がいいものじゃないでしょう？

カルヴァー夫人 そんな試練なら、おまえ一人で耐えてもらった方がよさそうね。あたしは遠慮して

おきますよ。

コンスタンス ああ、母さん、お願い、ここにいて。ねえ、お願い、ぜひ。バーナードがすっかり変わってて、会わなきゃよかったアって思うかもしれない。もしそうなら、二人つきりでいたくないじゃない。母さんがいてくれた方が気が楽なの。

カルヴァー夫人 そう？

コンスタンス (悪戯あくごそうな表情で) それとも、反対に、二人つきりになりたいなって思うかもしれない。

カルヴァー夫人 どうも、難しい立場に置かれることになりそうだね。

コンスタンス ねえ、聞いて。もしバーナードがすっかり変わってたら、わたし、お天気と今年の小麦の収穫の話をする。それから暫くの間、黙ってあの人を見つめることにする。男の人って、黙って見つめられると、自分が馬鹿だばかって感じるものよ。馬鹿だばかって感じれば、居たたまれなくななって出て行くわ。

カルヴァー夫人 でも、なかには、それでもどうしたらいいのか分からない男もいますからね。大地

がぱっくり口を開けて飲み込んでくれればいいんだけど、そうもいかないし。(注3)

コンスタンス 反対に、もし昔のままの魅力的な人だうなって思ったら、それとなくピアノの上にハンカチを置くことにする。

カルヴァー夫人 何故？

コンスタンス 合図よ。母さんがどっこいしよって立ち上がって、あらあら、もうこんな時間、あたしは急いで帰らなくちゃ、って言うための合図。

カルヴァー夫人 そう、そういうことね。分かった。でも何故ピアノにハンカチを？

コンスタンス わたしが衝動の動物だから。わたし、衝動的にピアノの上にハンカチを置く癖があるの。

カルヴァー夫人 なるほど。でも、あたしは衝動つてもものは信じませんね。

ベントリーが入ってきて、バーナード・カーサルの来訪を告げる。彼は長身で、ハンサム、日焼けした健康そうな顔付きをしている。軀に脂肪も付いておらず、この四十五年間を遅く生きてきた様子がうかがえる。

ベントリー カーサル様です。(退場。)

コンスタンス こんにちは、ようこそいらっしゃいました。母を憶えてて？

バーナード (コンスタンスと握手をして) お母様はわたしのことは憶えていらっしゃらないと思いますよ。

コンスタンスは小さなハンカチをハンドバッグから取り出す。

カルヴァー夫人 “柔和なる答は憤恨を止む” なーんちゃって。(注4)

コンスタンス もうお茶の時間としては遅すぎますね。何かお飲みになりますか？

彼女はそう言いながら呼鈴のところに歩いてゆき、ついでにピアノの上にハンカチを置く。

バーナード ありがとう、でも結構です。こちらにうかがう前にちよつと一杯引っ掛けてきましたから。

コンスタンス 覚悟を決めるために？——わたしと再会する……。

バーナード 不安だったもので。

コンスタンス それで？ 予想なさったとおり、わたしすっかり変わった？

バーナード そういう意味ではないんです。

カルヴァー夫人 本当にコンスタンスに会うのは十五年ぶり？

バーナード ええ。この前イギリスに来た時にはお会いできませんでしたし、除隊した時には、すぐに日本に帰って仕事を立て直さなければなりませんでしたから。あれ以来、残念ながら、イギリスへ帰る機会はありませんでした。

二人が会話している間、コンスタンスは意味ありげな視線を母親に送っている。が、カルヴァー夫人は気づかない。コンスタンスは二枚目のハンカチをハンドバッグから取り出し、機

会を見て、それをピアノの上の一枚目のハンカチの横に置く。

カルヴァー夫人 今回は長く？

バーナード 一年です。

カルヴァー夫人 奥様は一緒に？

バーナード 結婚はしていません。

カルヴァー夫人 あら、コンスタンスは、あなたは日本人と結婚なさったって……。

コンスタンス お母さん、何言うの。わたしそんなこと何にも言っていないわ。

カルヴァー夫人 あら、そう。あたし、多分ジュリア・リントンのことを考えてて混乱したのね。ジ

ュリアはエジプトの州知事と結婚したんですよ。きつと、とっても幸せに暮らしてますわ。だって、まだ旦那様に首を刎ねられたって話は聞きませんもの。

バーナード ところで旦那さんはお元気ですか？

コンスタンス ええ、とつても。多分そのうちここへ来ると思います。

バーナード 確か小さな妹さんがいらつしやいましたよね。今は外出中？

カルヴァー夫人 マーサ？ あの子はさつき来て、また出て行きましたよ。

コンスタンス 妹はわたしとそんなに歳が違いますのよ。今はもう三十二。

カルヴァー夫人がハンカチに気づかないので、コンスタンスは居ても立ってもいられない様

子で、三枚目を取り出し、前の二枚の横に並べる。

カルヴァー夫人 東洋はお気に召して？

バーナード なかなか好いところです。

カルヴァー夫人はようやくハンカチに気づき、驚く。

カルヴァー夫人 あら、大変。いま何時かしら。

コンスタンス もう遅いわ。お母さん、今日は外で夕食をとるんじゃないか？ 着替える前に家で

少し休んだほうがいいと思うけど。

カルヴァー夫人 またいつかお会いしたいものですわね、カーサルさん。

バーナード ええ、是非。

コンスタンスは母親とドアのところまで進む。

カルヴァー夫人 じゃあ、さようなら。(声をひそめて)ハンカチがどつちの合図だったか思い出せ

なかったんだよ。帰れなのか、残れなのか。

コンスタンス その目を使えばすぐに判ったはずでしょ？——心ゆくまで話したい人だってことくら

い。十五年ぶりなのよ。

カルヴァー夫人 おまえが次から次へとハンカチを置くから、ますます混乱しちゃってね。

コンスタンス お願い、早く帰って。(声を大きくして) さようなら、お母さん。こんなに早く帰らなくちゃならないなんて、残念だわ。

カルヴァー夫人 さようなら。

彼女は出て行く。コンスタンスは部屋に戻る。

コンスタンス ひそひそ話なんかして、失礼な奴だと思いでしょね？ 母は秘密めかすのが好きなの。

バーナード ちっとも気にしていません。

コンスタンス さあ、座って、ゆつくりしてくださいね。……あなたのお顔をよーく見せて。昔とほとんど変わっていない。少しお痩せになって、皺しわがほんのちよつと増えたくらい。男の人っていないわ、羨ましい。人間がすっかりしていれば、歳をとるにつれて好いお顔になってゆくんですもの。知ってて？——わたし、もう三十六なの。

バーナード そんなことは問題じゃありません。

コンスタンス 一つお話させていただいていい？ お手紙をいただいた時、わたし、あなたに再会できるかと思うと嬉しくって、すぐにお返事を書いて今日のこの時間をお知らせしました。でも、

そのあとパニックに襲われたんです。返事を出さなければよかった、取り戻せるものなら何と少しでも取り戻したい、そう思いました。今日も一日中鳩尾みぞおちのあたりが苦しかった。この部屋にお入りになった時、わたし膝が震えていたの。お気づきになって？

バーナード また、一体どうして？

コンスタンス あら、分かっていたらっしゃるくせに。わたし、若かった頃は可愛かった、それは承知しています、それが分からないとしたらよほどの馬鹿ですわ。でも今は、昔のように可愛くはない。そのことも分かっています。分かっているんですが、そう思い知らされるのは、やっぱり辛いことですね。人は、面と向かってそんなことは言わない。わたしはわたしで、その事実から目を背けようとする。で、思ったんです、——女にとって一番辛いその事実を、そろそろ知るべき時じゃないかって。あなたにお越しいただいたのは、一つにはそのためだったんです。

バーナード わたしがどんな顔付きをしたにせよ、無礼だとお感じになったとしたら、お赦しください。そんな気持は毛頭ありませんでした。そんな風にはお考えにならないでください。

コンスタンス ええ、もちろんですわ。でもわたし、あなたのお顔を見つめていた。なんとまあ、この人も老けたものだなって表情が浮かぶんじゃないかと、ビクビクしながら。

バーナード それで？

コンスタンス あなたは、入っていらっしゃった時、なんだか恥ずかしそうな表情だった。わたしのことはお考えじゃなかったみたい。

バーナード おっしゃるとおり、あなたは十五年前とても可愛かった。そして今は、……素晴らしい。

あの当時より何倍もお美しい。

コンスタンス　ありがとう、そうおっしゃってください。

バーナード　信じていらつしやらないんですか。

コンスタンス　あなたはそう信じている、とは思いますが。それだけで充分嬉しい、感謝します。ね

え、おしえて、——何故結婚なさらないの？　そろそろなさった方がいいと思いますわ。さもな
いと手遅れになってしまいます。歳を取って独りで暮らすのって、寂しいわ。

バーナード　わたしはあなた以外の人と結婚したいと思つたことはない。

コンスタンス　あら、まさか、わたしに恋をして以来一度も恋をしたことはない、なんておっしゃる
んじゃないでしょう？

バーナード　ええ、何度か恋はしました、五回か六回。しかしいざとなると、やはり、自分が最も愛
しているのはあなたなのだという想いが浮かんできてくるのです。

コンスタンス　そうおっしゃってくださいるなんて、やっぱりあなたは善い方だわ。もしわたし以外の
女性は一度も愛したことがないなんておっしゃっても、わたし、信じなかつたでしょうし、それ
に、わたしのことをその程度の嘘を簡単に信じてしまう馬鹿な女だとお考えになっているのかと、
腹が立つたでしょう。

バーナード　恋した女性の中にわたしが見ていたのはあなたなのです。ある女性はあなたと同じ髪の色
をしていた。ある女性が笑うと、わたしはあなたの笑顔を思い出していた。

コンスタンス　あなたを不幸にしまったのかと思うと辛いわ。

バーナード　そんなことはありません。わたしは日本で楽しい時を過ごしてきた。仕事もやりがいがあるし、ちよつとした財も築いた。それに随分と面白い経験もした。あなたが、わたしではなく

ジョンと結婚なさつたからといって、あなたを恨もうなどという気持は毛頭ありません。

コンスタンス　ジョンのことは憶えてて？

バーナード　勿論。とても好い奴だった。夫としてわたしよりずっとふさわしい男だ。わたしと結婚していたら、きっと後悔の連続だったことでしょう。商売には浮き沈みがあるし、わたしといつたら、しょつちゅう癩癩玉を破裂させますから。ジョンといた方がずっと安全だし、安心していられる。それに、ジョンはあなたの望むものはすべて与えてくれる。ところで、今でもあなたを
コンスタンスとお呼びしてもよろしいでしょうか？

コンスタンス　もちろんですわ。ねえ、バーナード、あなたはとても好い性格だわ。

バーナード　ジョンとの生活は？　お幸せですか？

コンスタンス　ええ、とつても。これまで一度も不安な気持にさせられたことはない、とは言いません。そういうことが一度だけあつた。でも、その時わたし、自分を見失つてはいけけない、愚かな振舞いをしてはいけないうつて自分に言い聞かせました。今はそうしておいて良かったと思つています。正直、わたしたちの結婚は成功だつたと言えますし、自分は仕合せだと思つています。

バーナード　そうお聞きして嬉しく思います。こんな質問をしたら無礼な奴だと思ひになるかも知れませんが、お赦し下さい。——ジョンはあなたを愛していますか？

コンスタンス　ええ、そう確信しています。

バーナード で、あなたは？ あなたはジョンを？
コンスタンス とても。

バーナード ちょっと長くなるかもしれませんが、ひとつお話してもかまいませんか？
コンスタンス 途中で口を挿^はんでもかまわないとおっしゃるなら。

バーナード この一年イギリスに滞在している間、できるだけあなたにお会いしたいと願っているのですが、それを許していただきたいと……。

コンスタンス わたしもできるだけお会いしたいと思っていますわ。

バーナード それと、もう一つ、今下^おろしておきたい胸の間^{ふた}があるのですが。一度申し上げておけば

二度と触れることはないでしょう。……わたしは今でも、十五年前に結婚を申し込んだ時と全く同じように、あなたを愛している。多分、一生あなたを愛し続けると思う。諺^{ことわざ}にもありますが、

「矯^ためるなら若木のうち」——わたしのような年老いた者には新しい芸を憶える力は残っていないのです。しかし、ご心配なさることはありません。わたしはあなたのご家族に迷惑をかけるつもりは毛頭ない。あなたとジョンとの間に割り込もうなどという、そんな下劣なことは考えていない。人間は誰しも幸せになることを願っている。しかし、自分が幸せになるために他人を犠牲にしてもいい、とは思っていません。……

コンスタンス なーんだ、それだけ？ それだけなら別に長いお話じゃありません。晩餐会の席だったら、あの人ほんの二言三言^{ふたことみこと}しか話さなかったって言われますわ。

バーナード あなたにお願いしたいのは、友人として付き合ってくださいと、それだけです。もし

もそのお付き合いの中でわたしがあなたを愛している素振りを見せてしまったとしても、それはわたしの問題で、あなたやジョンには全く関係のないことだとお考えください。

コンスタンス ええ、そうね、バーナード。そう考えるようにいたしますわ。

ドアが開き、ジョンが入ってくる。

ジョン おっと、失礼。取込み中だとは知らなかった。

コンスタンス いいのよ。入って。こちらバーナード・カーサルさん。

ジョン 初めまして。

バーナード わたしを憶えていないようですね。

ジョン そう率直に訊かれたんじや、こっちも率直に答えた方がいいと思います、どうも憶えていないようです。

コンスタンス ジョン、あなたったら。バーナードさんは実家へよくいらつしやったのよ。

ジョン 結婚する前ってこと？

コンスタンス そう。あなたも何度か、わが家で一緒に週末を過ごしたのよ。

ジョン そうか。でも、もう十五年も前のことだからな。(バーナードに) 申し訳ありませんが、ど

うも憶えていないようです。でも、お会いできて嬉しく思います。

コンスタンス 日本からお戻りになったばかりなの。

ジョン ああ、そうですか。ええと、またお会いできるのを楽しみにしています。コンスタンス、夕食の前に倶楽部でブリッジをする約束があつてね、もう出掛けなくちゃならない。(バーナードに) いかがですか?—ここでコンスタンスと一緒に夕食をおとりになつては。今夜は急に盲腸の手術が入つて、コンスタンスは一人つきりなんです、かわいそうに。

バーナード そう言つてもらえて、とても嬉しいのですが……

コンスタンス ねえ、そうして。そうしてくだされば嬉しいわ。お時間はあるんでしょう?

バーナード あなたのためになら、いつでも都合つけます。

コンスタンス じゃあ、八時十五分にもう一度いらつしやつて。

[幕]

第二幕

場面は第一幕に同じ。二週間が経過している。

散歩用の服装をしたマーサが、帽子を被つたままで、絵入り新聞をながめている。ベントリ―が入ってくる。

ベントリ― カーサル様がお見えです。

マーサ あら。あがつてもらつて。

ベントリ― かしこまりました。(ベントリ―は出てゆき、すぐに戻つてきてバーナードの名を告げる。)カーサル様です。(退場。)

マーサ 姉さんは今着替えてる。すぐ来ると思うわ。

バーナード そうですか。まあ、そんなに急いでいるわけでもないし。

マーサ 一緒にラニラへ行くんですよ?—ポロを見に。

バーナード そのつもりです。今日は知合いが何人か試合に出るので。

マーサ ロンドンに愉しくつて?

バーナード 素晴らしいですよ。わたしのように長く東洋で暮らしてきた者は、イギリスに帰ると居心地の悪い思いをするものですが……。お姉さんとジョンのお蔭です。

マーサ ジョンは好き？

バーナード 勿論。とても親切にしてくれる。

マーサ ねえ、わたし、あなたのこと、よく憶えてるわ。

バーナード そんなはずはないでしょう。お宅にお邪魔していた頃、あなたはまだ小っちゃな子供だった。

マーサ 十六だったわ。姉さんのところに来る男の人たちを見て、わたし、骨の髄までゾクゾクしてたのよ。分らなかった？

バーナード しかしそのうち骨の神経も麻痺したことでしょう。たくさん男がいましたからね。

マーサ でも、あなたが一番熱心だった。なんてロマンチックな人なんだろうって、いつも思ってた。

バーナード 確かに、恐ろしくロマンチックだった。若いこととロマンチックであることはよく似合いますからね。

マーサ 少し歳を取ったからって、似合わなくなるとは思わないけど？

バーナード 今でもロマンチックだなんて思わないでくださいよ。わたしは商人で、大金を動かしているし、それに体重も増えた。若い時恋に恋した青年も、今は中年の、絹の値段の方が気になる

男になったということです。

マーサ あなたつてとんでもない嘘吐きね。

バーナード その言葉に対しては、あなたはとんでもなく不作法だ、とお応えしておきましょう。

マーサ あなたは姉さんに夢中だった。違う？

バーナード あれは遠い昔のこと。もう忘れました。

マーサ わたし姉さんに、ジョンじゃなくてあなたと結婚するように勧めたのよ。

バーナード どうして？

マーサ 一つには、あなたが日本に住んでたから。わたしなら、日本に連れてってくれる人と結婚したわ。

バーナード 今でも日本で暮らしていますよ。

マーサ あら、わたし、あなたと結婚したいわけじゃないわ。

バーナード そんな風に聞こえましたが。

マーサ ジョンのどこがそんなに良かったのか、ちっとも解らない。

バーナード お姉さんはジョンを愛していたんだと思いますよ。

マーサ 姉さん、後悔はないのかしら？——ジョンと結婚したことに。あなたとじゃなくって。

バーナード それは考えないことです。お姉さんは今の生活に満足している。ジョンを他の誰かと交換するなんて、そんな気持は毛頭ないと思いますよ。

マーサ わたし腹が立つ。あなた腹が立たない？

バーナード ちっとも。夫と妻がお互いに満足して暮らしている、——それ以上に望ましいことがありますか。

マーサ あなたは今でも姉さんに恋してる、そうよね？

バーナード 全然。

マーサ 嘘。あなたって、まったく頑固なんだから、驢馬ろばみたい。あなたを見てれば一目瞭然よ。姉さんがいる時、自分がどんな顔してるかご存知？ 姉さんを見る時、あなたの目の表情がどんな風に変化するかご存知？ “コンスタンス” って口にする時は、まるで名前にキスしてるみたいよ。バーナード マーサ、あなたは十六の時も憎たらしい子だったが、三十二になってますます憎たらしくなった。

マーサ それほどでもないわ。わたし姉さんが大好きなの。それで、あなたのことも好きになるうかなって思ってるくらい。

バーナード その気持を示したいんなら、わたしを放っておいてくれませんか。

マーサ どうしてそんなに怒るの？ 姉さんと一緒にいるところを五分も見れば、首っ丈だつてこ
と、誰だつて判る。

バーナード ねえ、いいですか、わたしはイギリスには一年しかいられない。その一年を愉しく過ごしたいんです。誰にも迷惑をかけたくはないし、面倒なことは起こしたくない。わたしはお姉さんとの友情を大切にしている。その友情に罅ひびが入るようなことは起こってほしくない。

マーサ 姉さんが求めているのは友情以上のものかもしれないわ。そう考えたことない？

バーナード ありません。

マーサ あら、わたしに飛びかかりそうな顔付き。わたしに噛みつく必要はないんじゃない？

バーナード お姉さんはジョンと幸せに暮らしている。そこに割って入って、その完璧ともいえる関係を壊そうなどと、そんな気は毛頭ありません。わたしをそんな卑劣な人間だとお考えだったとは……。

マーサ でも、馬鹿ねえ、あなた知らないの？——ジョンはもう長いこと浮気してるのよ。皆んな知ってるわ。

バーナード 信じませんね。

マーサ 誰でもいいから訊いてごらんさいな。母さんにでも、バーバラにでも。皆んな知ってるわ。知らないのは姉さんだけ。

バーナード 本当のはずがない。二、三日前、夕食の席でドラム夫人と一緒にりましたが、ジョンとコンスタンスほど仲の良い夫婦に会ったことはないと言っていました。

マーサ マリー・ルイズがそう言ったの？

バーナード ええ。

マーサは笑い出し、笑いを止めることができない。

マーサ さすが、図々しい女。お気の毒なバーナードさん。ジョンの浮気相手は、そのマリー・ルイズなのよ。

バーナード しかし、ドラム夫人はお姉さんの一番の親友でしょう。

マーサ そうよ。

バーナード もし嘘だったら、その首根っこを押し折ってやる。

マーサ いいわ、やって。

バーナード 失礼。馬鹿なことを言ってしまった。

マーサ 気にしてないわ。わたし、男の人は乱暴なのが好きなの。あなたのような男が姉さんには必要なのよ。

バーナード 一体何が言いたいんです？

マーサ このままにしておくわけにはいかないのよ。姉さん完全に虚仮こいつにされてる。立場がないでしょう。誰かが知らせるべきなのよ。みんな尻込みしてるから、なら、わたしがその役を買って出ようと思ったの。そうしたら、母さんが、許さない、それはどうしても駄目だって。わたし、何も言わないって約束させられちゃった。

バーナード わたしがその役を買って出ると思ったら大間違いですよ。

マーサ ええ、分かってる。あなたに上手うまく話せるとは思わないもの。でもこのままにしておくわけにはいかないでしょう。きっとそのうち姉さんにも判っちゃう。だから、あなたにお願いしたいのは、要するに、……姉さんの傍そばにいてやってほしいの。

バーナード しかし、ダラム夫人の旦那さんは？

マーサ ご亭主はお金を儲けることしか頭がないの。自分が奥方を愛してさえいれば、奥方も自分を愛してるもんだって信じ込んでる、お目出度い人なのよ。マリー・ルイズが旦那さんを操あやつるの

なんて、お茶の子さいさい。

バーナード お姉さんは全く疑ってないんですか。

マーサ 全然。顔を見ればすぐ判る。まったく、もう、姉さんのあの自信満々な態度を見ると気が狂いそう。

バーナード いっそ知らないままの方が良いんじゃないんですか？ あんなに幸せそうなんだし、何の屈託もない。眉間みまに皺しわを寄せてるところなんか見たことありません。純真で、人を信じ切った目をしている。

マーサ あなたは姉さんを愛してる、そうよね？

バーナード お姉さんの幸せを何よりも祈っているという意味では。

マーサ あなた、確か四十五だったわよね？——忘れてたけど。

バーナード マーサ、どうしてどうして、あなたはなかなかの策士だ。

「ベントリー、ベントリー」と呼ぶコンスタンスの声が階段の方から聞こえる。

マーサ 姉さんだ。母さんどこに行っちゃったのかしら。わたし、向こうへ行行って、手紙を書かなくちゃ。

バーナードはマーサの言葉に何の注意も払わない。彼女が部屋を出て行く時も何の動きもし

ない。暫くしてコンスタンスが入ってくる。

コンスタンス お待ちになった？

バーナード たいして。

コンスタンス あら、何かあったの？

バーナード わたしに？ いいえ、何も。どうして？

コンスタンス だって変な顔してるんですもの。それに、瞳にいつもの輝きもないし。

バーナード そうですか、それは意識しなかった。

コンスタンス 何か隠そうとしてるんじゃない？

バーナード そんなことはありません。

コンスタンス 日本から何か悪い知らせでも？

バーナード いや。それどころか、絹はいま大変なブームです。

コンスタンス じゃあ、どこかのご令嬢と婚約なさったとか？

バーナード いいえ、そんな。

コンスタンス 隠し事をする人って嫌い。

バーナード 隠し事なんて……。

コンスタンス あなたの表情がわたしに読めないと思って？

バーナード そうおっしゃってもらえるとは……。この無様な顔に注目してください。この無様な顔に注目してください。この無様な顔に注目してください。

夢にも思いませんでした。

コンスタンス (突然閃いたらしく) そうか！ 妹がいたんでしょう、違う？ マーサはまだ帰って

いませんよね？

バーナード お母さんを待っているとかで、書かなくてはならない手紙があると言って向こうの部屋に行きました。

コンスタンス マーサと話したのね？

バーナード (できるだけ何でもないことのように) ええ。少しばかり、……天気について。

コンスタンス (何が起こったのか直ちに理解して) ああ、そういうことね。……わたしたちすぐに

出発した方が良くないじゃない？

バーナード 時間は充分あります。あまり早く着いてもしょうがないでしょう。

コンスタンス じゃあ、帽子は脱ごうと。

バーナード それに、この部屋はとても気持がいい。本当に素敵なお部屋だ。

コンスタンス そう思って？ わたしがデザインしたのよ。バーバラ・フォーセットはわたしにインテリアの仕事をしていないか？ 言うの。バーバラは今そういう関係の仕事をして、結構儲かっているみたいなの。

バーナード (質問することの躊躇いを微笑みに隠して) 満足していませんか？——今の生活に。コンスタンス (明るく) 仕事を持ちたいからといって、必ずしも今の生活に不満だということにはなりませんわ。いつもパーティー、パーティーじゃ、誰だって飽きるんじゃない？ でも、実際

のところ、バーバラの誘いは断ったの。

バーナード (どうしても答えが欲しいといった風に) 幸せ……なんですね？
コンスタンス とつても。

バーナード この二週間、あなたのお蔭でとても楽しかった。ずっとイギリスで暮らしているような気がします。あなたは本当に親切にしてください。

コンスタンス そう考えてもらえて嬉しい。でも、わたし、何か特別なことをしてるなんて思っていないよ。

バーナード いえいえ、そんなことはない。お目にかかることを許してください。

コンスタンス あら、そんなことなら街角のお巡りさんにだって許してますわ。

バーナード ねえ、コンスタンス、わたしがいつもつまらないことばかり話しているからといって、あなたを愛していないなどは考えないでください。わたしは以前と同じように……

コンスタンス (冷静に) そのことなら、イギリスに戻っていらっしゃったとき約束したんじゃないやありません？——あなたのお気持は全くあなただけの問題、わたしには関係のないことだって。

バーナード あなたを愛しても気を悪くはなさいませんよ。

コンスタンス 人間、誰も皆、お互い同士愛すべきじゃないやなかったかしら？ (注5)

バーナード からかわないでください。

コンスタンス ねえ、そんな風におだてていただいて、とっても嬉しいし、感動しちゃいます。自分のことを気にかけてくれる人がいるって、素敵なことだわ、——こんなにも……

バーナード (彼女の言葉を遮って) 深く。

コンスタンス ……長い年月が経った後でも。

バーナード 十五年前誰かに、おまえはそれ以上にコンスタンスを愛せるかと訊かれたら、そんなことできつくないと答えたでしょう。しかし今、わたしはあの時の何倍も、何十倍もあなたを愛している。

コンスタンス (彼の言葉を無視して、前の自分の言葉の続きとして) でも、今は愛情の告白はしてほしくないの。

バーナード 分かりました。もう、しません。わたしにはあなたという人が分かりすぎるほど分かっている。

コンスタンス (愉しそうに、そして、ちょっと面喰らったように) じゃあ、この五分間あなたは何をなさっていたのかしら。

バーナード あまりにも明らかな事実を二、三お話しただけのつもりですが。

コンスタンス そうね。そうよね。ごめんなさい。何か全然違うものだったような気がして……。ねえ、あなたならどんな風に愛の告白をなさるのか、わたし興味津々なの、って言ったら、また誤解なさるでしょうね？

バーナード (いかにも人が善さそうに) わたしをお笑いになっているわけだ。

コンスタンス 自分を笑うことの大切さを教えるために。

バーナード この二週間、わたしは、良い子だったでしょう？

コンスタンス ええ。この人、猫を被^{かぶ}つてるんじゃないかって、ずっとそう思っていました。
バーナード ほんのちよつとだけ、胸に聞^きえていることを申し上げたいのですが。
コンスタンス わたしだったら止^やめておきますわ。

バーナード しかし、あなたはわたしではない。……一度でいいから言っておきたいのです、——わたしにはあなたの全てが宝物なのです、あなたの靴の残した跡でさえ。わたしにはこの世界にあなた以外の女性^{ひと}は誰もいない。

コンスタンス 嘘^{うそ}ばかり。六人はいたとおっしゃいましたわ。今は七人目。

バーナード でも、みんなあなただったのです。心から愛しています。崇拜^{ちやうはい}していると言ってもいい。あなたほど素晴らしい女性^{むすめ}はいない。わたしはまったく馬鹿^{ばか}な人間^{にんげん}で、いざとなると、心の中にある大切なことがどうしても上手^{うま}く言えないのですが、全身全霊^{ぜんしんぜんれい}あなたを愛している。どうか知っておいてほしいのです、——もし何か困ったことがあったら是非^{ぜひ}知らせてほしい、少しでもお役に立てるならそれ以上の喜びはない、そのことを。

コンスタンス そう言っていただけで嬉しい。でも、困ったことなんて何も起こらなくてよ。

バーナード 何時^{いつ}いかなる時^{とき}でも、どんな状況^{じやうきやう}でも、当^{あた}てにしてください。大丈夫^{だいじゆう}です。あなたのためならどんなことでもします。必要^{ひつやう}になったら、ただちよつと合図^{がしう}してください。喜^{よろこ}んで、この一命^{いちめい}を懸^かけて、お役に立ちたいと思います。

コンスタンス あなたって、本当に善^よい人^{ひと}ね。

バーナード 信^{しん}じてくれないんですか？

コンスタンス (魅力的な笑^{わら}みを浮かべて) 信じますわ。

バーナード あなたにとつてこれが大きな……いや、ほんのちよつとした意味^{いみ}でも持つなら嬉しいのです。

コンスタンス (感動^{かんとく}したように) 大きな意味^{いみ}を持ちますわ、ありがとうございます。

バーナード そのことだけ申し上げておきたかったです。

コンスタンス (いつもの冷静^{れいせい}さを取り戻^{もど}して) でも、なぜ今^{いま}そんなことをおっしゃる必要がある？

バーナード ただ胸^{むね}の間^まを取り除^といておきたかったです。

コンスタンス ああ、そうね……。

バーナード 怒^{いか}ってはいませんよね。

コンスタンス 怒^{いか}るだなんて。わたしはそんなお馬鹿^{ばか}じゃありませんわ。……マーサも結婚^{けっこん}した方が良^よいのに。

バーナード わたしが妹^{いもうと}さんと結婚^{けっこん}するとはお考えにならないでください。

コンスタンス それはないから安心して。ただ、旦那^{だんな}さんがいればマーサにも色々^{いろいろ}とやる事が出来^でていいんじゃないかと。今は暇^{ひま}がありすぎるのね。ねえ、マーサは本当^{ほんとう}はとても良^よい子^こなんですよ。もちろん嘔^{うそ}吐^{そつ}きだけで、でも他の点^{てん}では問題^{もんだい}ないわ。

バーナード そう？

コンスタンス 女^{おんな}は多^{おほ}かれ少なかれ嘔^{うそ}吐^{そつ}きだけで、それにしても、ひどい嘔^{うそ}吐^{そつ}き。……さあ、そろそろ出発^{しゅつぱつ}しましょうか。試合^{しあひ}が終わ^わった後^{あと}着^きいてもしようがないでしょう。

バーナード そうですね。では、出発しますか。
コンスタンス じゃあ、帽子を被らなくちゃ。ところで、今までずっとタクシーを待たせていたんじゃないでしょうね。

バーナード 今日は自分の車で来ました。わたしの運転でお連れしたかったから。

コンスタンス セダン、それともオープンカー？

バーナード オープンカーです。

コンスタンス あら、じゃあもつと小さな帽子にしなくちゃ。こんなに鰐つばが広いと風で飛ばされちゃう。

バーナード 申し訳ありません。先に言っておくべきでした。

コンスタンス あら、そんなことかまいませんわ。すぐに戻ってきます。どうぞ、寛くつろいでいて、――
寛げる時に。

コンスタンスは出て行く。暫くしてベントリーがマリー・ルイズを案内してくる。

マリー・ルイズ あら、こんにちは。(ベントリーに) ミドルトン氏にすぐに伝えて。

ベントリー かしこまりました、奥様。(退場。)

マリー・ルイズ (かなり狼狽した様子で) ちょっとだけジョンと話したかったんだけど、患者さんが何人もいて。それで、ここに来れないかどうか訊いてくるようにってベントリーに頼んだの。

バーナード じゃあ、わたしは居ない方が好いでしよう。

マリー・ルイズ ホントにごめんなさい。とっても急いでの。ジョンが診察の邪魔されるのは嫌いだってことも分かっているんだけど。

バーナード わたしは隣の部屋に行っています。

マリー・ルイズ コンスタンスを待ってるの？

バーナード ええ。ポロを見に行くんです。いま帽子を取り替えに行きました。

マリー・ルイズ そう。ベントリーがコンスタンスは二階に居るって……。じゃあ、ホントにごめんなさいね。一分で済むから。(バーナードが隣の部屋に下がるうとすると同時にジョンが入ってくる。) ああ、ジョン、診察中に呼び出したりして、ごめんなさい。

ジョン なーに、急ぎの診察はないから。二、三分待たせたってどうってことないですよ。(バーナードがドアを開ける。するとジョンの話し方が変わる。二人は今小さな声で早口に話す。) どうかした？

マリー・ルイズ モーティーが……。

ジョン モーティマーが？

マリー・ルイズ 感づいてるみたいなの。

ジョン 何故？

マリー・ルイズ 昨夜ゆうすとっても様子が変だった。おやすみを言いにあたしの部屋に来て、ベッドに腰掛けてお喋りしたんだけど、今夜はずっと何してたのかって訊くの、やさしい声で。

ジョン 話したりしなかっただろうね。

マリー・ルイーズ もちろんよ。あたし、ここで夕食をいただいてたって答えた。そうしたら、あの人突然立ち上がって、おやすみって一言だけ言うとそのまま出てった。とっても変な声だったから、あたし、目が点になっちゃった。七面鳥の鶏冠とじかみたいに真っ赤な顔してた。

ジョン それだけ？

マリー・ルイーズ 今朝はおはようも言わずに出掛けた。

ジョン 多分、急いでたんだよ。

マリー・ルイーズ おはようも言わずに出掛けちゃうなんて、これまで一度もなかった。

ジョン そりゃ、例の、蚤のが馬に見えるってやつさ。

マリー・ルイーズ ジョン、冗談は止よして。あたし、不安で不安でたまらないの。分かって。

ジョン 分かるよ。でも大丈夫、何も心配することないって。

マリー・ルイーズ 男の人って何なんにも分かってないんだから。問題なのは小さなことの積み重ねなのよ。ああ、あたし、心配で心配で気が狂いそう。

ジョン ねえ、いいかい、疑いをもったからって、証明できるわけじゃない。

マリー・ルイーズ あの人、証拠は何も持っていないと思う。でも、いろいろと厭いやなことするかもしれない。コンスタンスの心に疑いの種を蒔まくってことはないかしら？

ジョン コンスタンスは絶対信じないさ。

マリー・ルイーズ 万が一最悪の事態になっても、あたし、モーティマーなら何とかできると思う、あ

の人あたしに夢中だから。自分に夢中になってる男を操るのはそんなに難しいことじゃないわ。

ジョン きみにとつちや、モーティマーなんて赤子の手を捻ひねるみたいなものだろうな。

マリー・ルイーズ でも、コンスタンスに知られたら、……ああ、死にたくなっちゃう。なんたって、一番の親友だし、あたし、コンスタンスが大好きなんですもの。

ジョン コンスタンスはよく出来た人さ、きつと赦してくれるよ。まあ、取越し苦労だとは思うけど、でも、もしそうじゃなくって、モーティマーが何か確かな証拠を握にぎってるとしたら、ぼくはコンスタンスにすべて打ち明けるね。

マリー・ルイーズ 駄目、そんなことしないで！

ジョン まあ、一悶着ひとちんちやくは避けられないだろうな。女性ってのは拗すねてみせるのが好きだから。でも、コンスタンスなら最後にはぼくたちを助けてくれるさ。

マリー・ルイーズ あなた、女性について随分解ずいぶんってるようね。あたしもコンスタンスがあなたを助けることは確かだと思う。でも、あたしはきつと踏みつけにされるわ。それが人間ってものじゃない？

ジョン コンスタンスに限って、そんなことないさ。

マリー・ルイーズ ジョン、よかったわね、あたしがあなたを信用してて。もしそうじゃなかったら、あたし、あなたがコンスタンスのことをそんな風に話すの聞いて、絶対焼餅やいばやいたもの。

ジョン ああ、やつと笑ってくれた。どうやら落ち着いたようだね。

マリー・ルイーズ あなたと話せてよかった。あたし、もうそんなに心配してない。

ジョン 心配することなんか初めから何もなかったのさ。

マリー・ルイーズ 多分思い過ぎだったんだと思う。でも、何にしても、あたしたち危ない綱渡りしてることに違いはないわ。

ジョン 心配している時のきみみて、何故そんなに可愛く見えるのかな？

マリー・ルイーズ そろそろ患者さんのところへ戻った方が良くない？ きっとみんな惨めな思いで

待ってるわよ。

ジョン そうだね。コンスタンスに会っていくんだらう？

マリー・ルイーズ そのつもり。こんにちほも言わずに帰ったら変に見えるでしょ？

ジョン (歩きかけながら) じゃあ、ぼくは行くよ。心配しなさんなつて。

マリー・ルイーズ ええ、そうする。多分、ちよつと良心の咎めを感じてたのね。気分転換に美容院に行つて髪を洗つてもらふことにする。

ジョンが出てゆこうとすると、マリーが入ってくる。続いてバーナード。

マリー (誇張とも言える真心を込めて) マリー・ルイーズ、今日ここであなたに会えるなんて！

何故ここに？

マリー・ルイーズ 大したことじゃないわ。

マリー 母さんを待つてるついでに手紙を書いてたら、バーナードさんがあなたが来てるつて。

マリー・ルイーズ ちよつとジョンに相談したいことがあつて。

マリー そう。どこか調子が悪いの？

マリー・ルイーズ あたしじゃないの。モーティーが最近ちよつと疲れてるようなの。それで、休暇を取るようにジョンの口から説得してもらえないかなと思つて。

マリー あら、そう。でも、そういうことなら外科のお医者さんじゃなくて、内科のお医者さんに相談した方がいいんじゃない？

マリー・ルイーズ あの人、ジョンに全幅の信頼を置いてるから。

マリー その点は間違いないわね。義兄さんはずつても信頼できるもの。

ジョン マリー、きみも何かあつたらばくに相談することさ。盲腸でも、扁桃腺でも、喜んで切つてさしあげますよ。

マリー ありがとう。でも、わたし、あなたのお蔭で、もう最低限必要なものしか残つてないの。これ以上どこか切り取られたんじや、生きていけなくなつちゃう。

ジョン なーに、女性は立っていられる脚さえ残つてれば悲観することはないさ。それだけで医者から充分同情と興味を引き出せるつて。

コンスタンスがカルヴァー夫人と一緒に入ってくる。

マリー・ルイーズ (コンスタンスにキスをして) コンスタンス！

コンスタンス 膝はどう？ 関節、まだ滑る？

マリー・ルイーズ もう半分諦めてるわ。この膝は持病ね。

コンスタンス そうかも。でも、あなたって、我慢強い。わたしだったら、とくにジョンに文句を言ってる。もつとも、わたしなら、どこか調子が悪くなっても、ジョンに診てもらおうなんて最初から思わないけど。

カルヴァー夫人 マーサ、待たせてごめん。苛々した？

マーサ いいえ、とつても愉しい時を過ごしてたわ。

カルヴァー夫人 他の人にとって？ それとも、あなたにとって？

コンスタンス 階段でお母さんに遇ったの。わたしは帽子を取り替えに行ってきたところ。バーナードがラニラへ連れてってくれるのよ。

ジョン そりゃ、いいね。

バーナード 大分遅れてしまいそうですがね。

コンスタンス まずい？

バーナード ちつとも。

ベントリーが小さな金属製の盆の上に名刺を載せて入ってきて、それをコンスタンスに渡す。
彼女は名刺を見て躊躇いの表情を浮かべる。

コンスタンス へんねエ。

ジョン どうかした？

コンスタンス 何でもない。(彼女はちよつと考えている。) 下にいるの？

ベントリー はい、奥様。

コンスタンス どうして名刺なんか……。いいわ、お通しして。

ベントリー かしこまりました。(退場。)

ジョン 誰なんだい？

コンスタンス ねえ、マリー・ルイーズ、ここに座って。

マリー・ルイーズ あたし、もう行かなくちゃ。あなたたちもでしょ？

コンスタンス 時間はたっぷりあるわ。どう、この帽子、気に入って？

マリー・ルイーズ ええ。素敵。

コンスタンス ジョン、何をぐずぐずしてるの？ 今日患者さんはいないの？

ジョン そうだ、二、三人待たせてあるんだった。すぐ行くけど、でも、その前に一服するくらいの権利はあると思うな。(彼はポケットに手を入れる。) そうか、此畜生、どこかに煙草入れを置き忘れたんだった。コンスタンス、きみ、見なかったよね。

コンスタンス ええ。

ジョン 今朝あちこち探したんだけど、見つからない。どこに置いてきたのかな。看護婦の部屋に電話して、忘れてないか確かめなくちゃ。

コンスタンス　なくしたんじゃないけど。
ジョン　そんなことないよ。どこかに置き忘れただけだと思う。

ドアが開き、ベントリーが来訪者の名を告げる。

ベントリー　モーター・ドラム様です。

マリィ・ルイズ　（狼狽して）ええっ！

コンスタンス　（素早くマリィ・ルイズの手首を掴んで）狼狽えないの、馬鹿。（モーター・

ドラムが入ってくる。赤ら顔で、四十歳くらい。大柄で太り気味。すぐにカツとなる類の男。今

この瞬間まさに怒りが爆発せんばかりの様子である。ベントリーは退場。）いらっしやい、モ

ーター。でも、こんな時間にどうして？　お仕事は？　それに、一体どうしてベントリーに名

刺を渡すなんて他人行儀なことを？

モーターはドアのところ立っまま、一同を見回す。

マリィ・ルイズ　モーター、どうかしたの？

モーター　（コンスタンスに。怒りを抑えきれぬように）あんたも知りたいんじゃないかと思っ

てね、——あんたの亭主は俺の女房と浮気してるんだ。

マリィ・ルイズ　モーター！

コンスタンス　（マリィ・ルイズの手首をしっかりと押さえたまま、冷静にモーターに向かっ
て）あら、どうしてそんなことを？

モーター　（ポケットから金の煙草入れを取り出して）見覚えがあるだろう。昨夜こいつの枕の
下で見つけたんだ。

コンスタンス　そう。助かったわ。どこに置き忘れたんだろうって思ってたの。（煙草入れをモテ

ーターの手から取りながら）届けてくれて、ありがとう。

モーター　（怒って）それはあんたのじゃない。

コンスタンス　わたしのよ。マリィ・ルイズのベッドに腰掛けた時、枕の下に置いたんだと思う。

モーター　それにはジョンのイニシャルが入ってる。

コンスタンス　ええ、そうよ。患者さんが感謝の証^{しるし}につてジョンにくれたんだけど、ジョンには勿体
ない素敵なものだから、わたしがもらったの。

モーター　俺がそんな話を信じると？　そんな馬鹿だと？

コンスタンス　ねえ、モーター、もしこれがわたしのシガレットケースじゃないとしたら、一体何

のためにわたしが嘘を？

モーター　こいつらは昨夜一緒に食事をしたんだ。

コンスタンス　そのとおりよ。マリィ・ルイズが電話してきて、あなたはシティーで宴会か何かあ
るから、ここで一緒に食事させてほしいって言ったの。

モーティマー　ここで食事を？　あんたも一緒に？

コンスタンス　そうよ。マリー・ルイズもそう言ったんじゃない？

モーティマー　それはそうだが……。

コンスタンス　簡単に証明できるわ。信じられないのなら、ベントリーに訊いてみたら。……、ジョン、呼鈴を鳴らしてくれる？

モーティマー　（当惑して）あつ、いや、やめてくれ。あんたがそう言うんなら、勿論信じる。

コンスタンス　ありがとう。わたしもみつともないところを見せずに済む。本当のこととはいっても、ベントリーにそれを証明してもらわなくちゃならないのは、やっぱりあんまり恰好のいいことじゃないですものね。

モーティマー　しかし、ここでみんなで食事をしたんなら、なんで女房のベッドにそれが？

コンスタンス　昨夜ジョンは手術があつて、食事のあと出かなくちゃならなかった。そこでマリ

ー・ルイズが、パリから取り寄せたドレスを見せたいから家に来ないかって誘ってくれたの。で、ぶらっと出かけたつてわけ。星の綺麗な、素敵な夜だったわ。あなたもそう思ったでしょ？

モーティマー　何言ってるんだ。何で俺が星なんか見上げなくちゃならないんだ、大事な仕事があるつてのに。

コンスタンス　わたしたち、パリのお洋服を全部試してみても、少し疲れたから、マリー・ルイズはベッドに横になって、わたしはそこに腰掛けて、お喋りしたの。

モーティマー　疲れたんなら何故家に帰って寝なかったんだ。

コンスタンス　ジョンが手術のあと迎えに来てくれることになってたの。

モーティマー　で、ジョンは来たのか。何時に来たんだ。

ジョン　実はそれができなくなっちゃつてね、手術が長引いて。まあ、時々あることなんだ。手術つてのは一旦始めると途中で止めるわけにはいかない。分かるだろ？

モーティマー　分からんね。俺には関係ないことだ。

コンスタンス　まあ、それはたいしたことじゃないわ。ねえ、モーティマー、問題は今あなたがマリー・ルイズとジョンにとんでもない言いがかりをつけてるつてこと。それに、わたしの心も傷つけてる。でも、わたしは冷静にあなたの話を聞くつもりよ。さあ、どんな証拠があるのか教えて。

モーティマー　証拠？　何言ってるんだ。そのシガレットケースだ。それを見たたん、すぐピーンときた。一足すーが幾つかぐらい誰だつて分かる。

モーティマー　（動揺していることを見せまいと、大袈裟に）俺が間違えるなんて有り得ない。

コンスタンス　大富豪だつて時には間違えるわ。あのピアポント・モルガンが死んだ時、額面七百万ドルの株券は紙屑同然だったじゃない。（注6）

モーティマー　（当惑して）コンスタンス、これがどんなにショックだったか、あんたには分からないんだ。俺は女房をとことん信じてた。だから、それを見つけた時は、ノックアウトパンチを喰らったみたいだった。あの時からずうつとこのことを考えてて、このまま行ったら気が狂うんじ

やないかと思つたほどだ。

コンスタンス　で、ここに来て一騒動起こしてやろうと思つたってわけ？——奥さんの部屋でわたしのシガレットケースを見つけたから。そんなの信じられない。モーティマー、あなたは世間をよく知ってるし、立派な実業家よ。それにとつてもインテリだし。きつと、まだ他に言うことがあるはずよ。何か隠してるにちがいない。わたしの気持を傷つけちゃいけないなんて、そんなこと考えないで。そこまで言つた以上、何もかも話すべきよ。わたしは全てが知りたいの。何もかも全部で。

暫しの間がある。モーティマーは、静かに涙を流しているマリー・ルイズから、呆れたような表情をしたコンスタンスへと視線を移す。

モーティマー　すまん。馬鹿なことをしちゃつたようだ。

コンスタンス　どうやら、そのようね。

モーティマー　本当にすまん、コンスタンス。このとおり、心から謝る。

コンスタンス　あら、わたしのことならいいのよ。確かにあなたは、わたしに恥をかかせた、——これ以上ない程の恥を。それにジョンについて、わたしの心に疑いの種を蒔いた。その種は……（彼女は言葉を探す。）

カルヴァー夫人　（コンスタンスの言葉を補つてやるように）芽を出すことはないでしょうけれど。

コンスタンス　（母親の言葉を無視して）……決して根こそぎにはできないでしょう。でも、それはもういい。わたし、気にしない。あなたが本当に謝るべきはマリー・ルイズに対してよ。

モーティマー　（謙虚に、恥じ入った様子で）なあ、おまえ、……。

マリー・ルイズ　触らないで。わたしに近寄らないで。

モーティマー　（惨めに、コンスタンスに）嫉妬つてものがどんなもんか、分かるだろう？

コンスタンス　分からないわ。悪徳の中でも、一番醜くて、嘆かわしいものだってこと以外。

モーティマー　（マリー・ルイズに）すまん、心から謝る。赦してくれないか。

マリー・ルイズ　友達みんなの前で、あたしを侮辱したのよ。あたしがコンスタンスをどんなに大切に思ってるか知ってるくせに。浮気したんじゃないかって、非難したけりやしてもかまわない。でも、ジョンとだけは……。

コンスタンス　そうよ。一番の親友、わたしの夫なのよ。牛乳配達だって、郵便配達だって構わないけど、一番の親友の夫を疑うなんて。

モーティマー　ほんとに見苦しいことをした。自分がなさけない。一体自分がどうなつちまつたのか、よく分からないんだ。だから、お願いだ、よく分からないでやつてしまった、ということと勘弁してくれないか。

マリー・ルイズ　あたしはあなたをずうっと愛してたわ。あたしほどあなたを愛してる人間はいない。なのに、……ひどいわ、ひどすぎる。

モーティマー　なあ、一緒に帰ろう。ここでは、言いたいことが上手く言えない。

マリー・ルイーズ いやよ。いや。

コンスタンス (モーティマーの腕に手を置いて、優しく) モーティ、奥さんを暫くそっとしておいてやって。あとでわたしからあなたの気持ちを話しておくから。今は動転してて当然でしょ？
とつても感受性の強い人なんだから。

モーティマー 今夜はバンクーパー夫妻と夕食をとることになってるんだ、八時十五分に。

コンスタンス そう。じゃあ、八時半に変更して。約束する、――間に合うようにマリー・ルイーズをお宅に届けるって。もちろん、着替えをする時間も考えてのことよ。

モーティマー もう一度やり直すチャンスをくれるだろうか。

コンスタンス 大丈夫。

モーティマー こいつのためなら、何でもする。(コンスタンスは指を唇のところに持ってゆき、次いで、意味ありげに自分が身につけている真珠の首飾りを指さす。モーティマーはすぐには理解できない様子だが、それが何を意味しているのか解ると、嬉しそうに頷く。) あんたはほんとに賢い人だ。(彼は部屋を出る前に立ち止まり、ジョンに手を差し出す。) なあ、握手してくれ。

俺が間違ってた。俺は、自分が間違ってた時、それを認めないようなケチな男じゃない。

ジョン (心から) なーに、気にしなさんな。あのシガレットケースを見たら、誰だっておかしいと思うさ。コンスタンスはしよっちゅう物を置き忘れるんだ。それを思い出してたら、こんな金目の物、あげたりはしなかったんだ。これからは気をつけるよ。

モーティマー どんなに肩の荷が下りたことか、きみには分からんだろうな。ここに来た時は、自分

が百歳になっちゃったように感じてたんだ。けど今は、二歳の子供の気分だ。

モーティマーは出てゆく。ドアが閉まった瞬間、全員の態度が一変する。それまでの緊張感が解け、安堵感が広がる。

ジョン コンスタンス、ありがとう、きみは凄いいよ。このことは一生忘れない。あの冷静さ！ ぼくは蒼くなったり赧くなったり、ハラハラドキドキの連続だったけど、きみは臆一本動かさなかった。

コンスタンス さあ、どうぞ、これ、あなたのシガレットケース。これからは、鎖でも付けて鍵の束と一緒に持ち歩くことね。

ジョン きみが持ってくれないか。二度とこんな目に会いたくないから。

コンスタンス ところであなた、昨夜モーティマーの家に入って行くのを誰かに見られなかったでしょうね？

ジョン 大丈夫だと思うよ。マリー・ルイーズの鍵を使ったから。

コンスタンス なら、いい。召使はモーティマーに訊かれても、何も答えられないってことよね。その点だけが心配だったんだけど、でも、賭けてみるしかなかったのよ。

マリー・ルイーズ (ちよっと恥じ入るように、不安げに) ああ、コンスタンス、あなたがあたしのことどんな風に思ってるかと思うと……。

コンスタンス わたしが？ 前とまったく同じよ。あなたは可愛い人。

マリイ・ルイーズ 腹を立てて当然だと思う。

コンスタンス そうかもね。でも、その気はないわ。

マリイ・ルイーズ そんなはずない。あなたに恥をかかせたのよ。あたし、とんでもない女だと思う。

それなのにあなたは……、あたしに復讐して当然なのに、そうしようとしない。ああ、自分が恥ずかしい。

コンスタンス (面白そうに) 恥ずかしいのはジョンと浮気したから？ それともそれが露頭たら？

マリイ・ルイーズ コンスタンス！ そんな薄情なこと言わないで。罵つてもいい、踏みつけてもいい。でも、そんな風に優しく笑わないで、お願い。あたし、いたたまれなくなっちゃう。

コンスタンス ここで喧嘩を売ってほしいの？ まあ、その気持は理解できるし、同情もする。(きわめて穏やかに) でも、実際、モーティマーの言ったことで、わたしが知らなかったことは何も無いのよ。

マリイ・ルイーズ (吃驚して) ずっと知ってたって言うの？

コンスタンス ええ、ずうっと。この六ヶ月、わたし必死だった、——母さんの深遠な人生哲学やら、何が何でも真実を語りたがるマースの情熱やら、バーバラの無言の同情やら、そういうものに押し潰されないように。あなたたちの忌むしい秘密がわたしに向かって言われませんように。とても無理かなって思うこともあった。でも、何とか今日までは、決定的な一言は言われず

に済んできた。それでわたしも、目の前にぶら下がってる事実を無視することができた。厭らしい姿でわたしを見つめている事実をね。

マリイ・ルイーズ でも何故？ 何故なの？ そんなの普通じゃない。どうして何もしなかったの？

コンスタンス それはね、これがわたしの問題だから。

マリイ・ルイーズ (理解したように思っ) ああ、そういうこと。

コンスタンス (かなり辛辣に) 違うわ、勘違いしないで。わたしはジョンを裏切ったことは一度もありません。自分の火遊びを隠すために、あなたたちのことを大目に見てきたんじゃない。

マリイ・ルイーズ (ちよつと苛々しはじめる。) でも陰ではいつもあたしを嗤ってたんでしょ。

コンスタンス (優しく) ねえ、マリイ・ルイーズ、わたしがあなたから満足感を奪ったからって——この六ヶ月わたしを騙し果せてたっていう満足感をよ——それを奪ったからって、怒っちゃいけないわ。わたしがそんなケチくさいことをする人間だと思う？

マリイ・ルイーズ なんだか、頭がクラクラしてきた。

コンスタンス そんなに素敵な頭が？ 少し横になった方が良いんじゃない？ バンクーバー夫妻と食事をするんなら最高の姿でいたいでしょう？

マリイ・ルイーズ それにしても、あの人どこへ行ったのかしら。

コンスタンス ほら、あなた、この間カルティエのお店で真珠のネックレスを指差して、モーティマーの考えじゃ高すぎるそうなの、って言ったでしょう？ あれを買いに行ったのよ、あなたのために。

マリー・ルイーズ（興奮して）えつ、本当？ ホントにそう思う？

コンスタンス 男ってというのは生まれながらに、もし女性の心を傷つけてしまったら——あたしたち女ってすぐ傷つくでしょ？——そうしたら、それを癒すには、何かちよつとした、でも、うーんと値が張る宝石が一番だって、よく分かっているのよ。

マリー・ルイーズ あの人、気を利かせて、今晚使えるようにって、持ってきてくれるかしら。

コンスタンス ねえ、あなた、＼はい、待ってました＼なんて受け取っちゃ駄目よ。それは馬鹿な女のすること。あなたは夫からとんでもない侮辱を受けたのよ。妻に対する侮辱の中でも一番ひどい侮辱。妻の愛情を踏みつけにして、夫に対する信頼を粉々にした——そういうことでしょ？ それを忘れないこと。

マリー・ルイーズ コンスタンス、あなたって、賢い！ そのとおりよ。

コンスタンス 何をすべきか言う必要はないと思うけど、念のため……。まず、旦那さんに話しかけられても応えちゃ駄目。でも、追いつめすぎて、自己弁護を始めさせてもいけない。自分は獣のような男だったって感じさせるところまで泣いてみせるの。でも、泣きすぎて喉を腫らさないこと。もうあなたとは別れるって言って、泣きながらドアのところまで走りなさい。でも、ドアを開ける前に旦那さんに引き留めてもらえるように、間合いに気をつけてね。それから、あなたはひどい人だとか、もう我慢できないとか、何でもいから同じことを何度も繰り返すの。それで男は参るものよ。モーターが何か言っても、気づかない風をして、もう一度同じことを言うの。そうすれば、最後には、旦那さんは絶望的な気持になる。頭が割れそうだったことになる。

毛穴という毛穴から汗が吹き出して、虐められた野良犬みたいに、惨めで、みすぼらしくって、糞果れてた様子になる。そうなったら、そのとき初めて、いいわ、受け取ることにするって言うの。この心の傷の深さに見合うほどのものじゃないけれど、自分は人を赦すだけの優しさを持つた人間だから、かたじけなくも受け取ってやることにするって。可哀想に、いじけた旦那さまが大枚一万ポンドを叩いて買ったネックレスをね。

マリー・ルイーズ（とりわけ満足げに）違うわ、一万二千ポンド。

コンスタンス 絶対にあなたが感謝しちゃう駄目よ。それじゃ、こっちのペースじゃなくなっちゃう。

旦那さんがあなたに感謝するようにさせるの。大したものだとも思わないけど、あなたを喜ばせるために、プレゼントさせてあげる——そう思わせるの。いい？ 分かった？ ところで、ここへは車で来たの？

マリー・ルイーズ ううん。気が動転してて、車を運転するような気分じゃなかったの。タクシーで来た。

コンスタンス ジョン、お願い、マリー・ルイーズをタクシー乗り場まで送って。

ジョン オーライ。

マリー・ルイーズ だめ。ジョンは勘弁して。あたしにもそれなりのデリカシーはあるの。

コンスタンス あら、そう？ じゃあ、バーナードに送ってもらいましょう。

バーナード 喜んで。

コンスタンス（バーナードに）でも、戻ってらしてね。

バーナード 勿論です。

マリー・ルイーズ (コンスタンスにキスをして) これを良い教訓にする。あたしも馬鹿じゃないから、経験から学ぶことはできるわ。

コンスタンス 少なくとも、用心することの大切さはね。

マリー・ルイーズは出て行く。続いてバーナード・カーサル退場。

ジョン きみ、どうして判ったの?——マリー・ルイーズがモーターマイヤーに、ここで食事をしてたつて言ったこと。

コンスタンス あの人のあれでなかなか賢いところがあるから、古いので間に合うんなら、なにも新しい嘘を發明しなくても大丈夫だって、そう思うはずでしょう、違う?

ジョン もしモーターマイヤーが本当かどうかベントリーに確かめるって騒いだら、厄介なことになってたな。

コンスタンス あの人のその勇気がないことは判った。紳士的じゃないことを躊躇なくやれるのは本物の紳士だけ。モーターマイヤーは、自分は紳士と紳士じゃないところの境目にいると思ってるでしょ、だから、躊躇うのよ。

マリーサ (意味ありげに) 義兄さん、患者さんが苛々してるんじゃない?

ジョン 待たせときゃいいさ。病人てのは、時間が経てば経つほど心配になってくるんだ。だから、

その不安が最高潮に達したとき手術を勧めれば、是非ともやってくださいってことになる。たとえ二百五十ポンド掛かる手術でもね。

マリーサ (唇をすぼめて) 今から姉さんに話そうと思ってることがあるんだけど、あんまり聞きたくないんじゃない?

ジョン きみがぼくについて何かありがたしいことを言うつもりだと、この鋭い脳味噌が警告を発しているからこそ、自分の耳で聞きたくて、ここにこうやって残っているのさ。医者としての義務を果たせと呼ばれる天の声を無視してね。

コンスタンス マリーサはこの二週間、言いたくて言いたくてしようがなかったんだけど我慢してきたのよ。奇跡的なことだわ。だから、こうなった以上、マリーサには言いたいことを言う権利があると思う。

ジョン 言いたいことを言えないで苦しんでるなら、来るところを間違えたんだよ。精神科の医者へ行ったほうがいい。

マリーサ わたしの言いたいのは一っだけ。それに、義兄さん、あなたにも是非聞いてほしいわ。(コンスタンスに) 何故姉さんがあのひどい女を守ってやろうとしたのか解らない。これ以上スキヤンダルを大きくしたくない、つてことくらいしか思いつかない。……

カルヴァー夫人 (マリーサの言葉を遮って) それ以上言う前に、あたしにちよつとさせて。(コンスタンスに) ねえ、おまえ、頼むから、何をするにしても性急に決めないでちょうだいね。こんな場合は、よく考えてみるのが大切なんです。だから、まずジョンの言い分を聞いてやら

なくちゃいけない。

マーサ この人にどんな言い分があるって言うの。

コンスタンス (皮肉っぽく) ほんとよね。あなた、どんな言い分がおあり？

ジョン 何とも言いようがない。ぼくはこれまでいろんな人の結婚生活を見てきたが……

コンスタンス (彼の言葉を遮って、微笑みながら) 話を逸らさないで。わたしたちのじゃなくて、他の人たちの結婚生活？

ジョン (続けて) ……今回のことに関しては、あの天使ガブリエルだって言い訳は見つけられないと思う。

コンスタンス でも、天使ガブリエルがあなたのような困った羽目に陥入ることはありえないと思うけど。

ジョン そりゃそうだ。これからどうなろうと、ぼくはすべてを受け入れるつもりだ。

コンスタンス (誰に向かってということなく) それ以上立派なことは、誰にも言えないでしょうね。ジョン コンスタンス、きみが怒ることも、騒ぎ立てることも覚悟している。きみにはそうする権利があるし、そうして当然だ。ぼくはその非難を甘んじて受ける。どうとでも、好きなようにしてくれ。髪を掴んで部屋中引きずり廻したっていい。顔に蹴りを入れたっていい。踏みつけたっていい。ぼくは床に這いつくばって謝る。塵を舐めろと言うんなら喜んで舐める。ぼくは屑だ。屑だ。

コンスタンス かわいそうに、あなた。でも、一体なにを騒ぎ立てろって言うの？

ジョン 自分がどんなことをしてしまったか、充分わかっている。きみは、善良で、貞節で、愛すべき妻だ。ぼくのためにとよく努めてくれるし、娘のこともよく考えてくれている。細々した家事も抜かりなくやってくれる。きみは、ぼくの十倍は価値がある。もしぼくに真面目な心の欠片でもあったなら、あんなことはできなかったはずだ。言い訳のしようがない。

マーサ (彼の言葉を遮って) あなたは姉さんを友達の前で侮辱したのよ。

ジョン ぼくは卑劣で狡い人間だった。

マーサ あなたはやったことは赦せない。

ジョン 自分が恥ずかしい。穴があいたら入りたくらいだ。

マーサ たとえ姉さんを愛していなかったとしても、それなりの配慮はしてあげられたはずよ。

ジョン ぼくはナイル河の鱒のように冷酷で、チフス菌みたいに悪い奴だ。

コンスタンス ねえ、あなたたちがそんなに喋ったんじや、わたし、言うことがなくなっちゃう。

マーサ でも、姉さん、それでいいのよ。こんな人に言うてやることなんて何にもないわ。こんな人に向かって騒ぎ立てたら、それこそわたしたち女の沽券に関わる。姉さんが口汚く罵るだろうだなんて……、そんなこと考えること自体、この人には女つてもものが分かってないってことよ。

(ジョンに向かって) 義兄さんにもそれなりに真面目な判断力はあるんでしようから、姉さんが自由になることには反対しないわよね。

カルヴァー夫人 コンスタンス、まさか離婚しようって言うんじゃないでしょうね。

マーサ 母さん、そんな弱腰でどうするの。この、まるで信用できない、碌でもない男とこのまま一

緒にいたら、姉さんの人生はどうなっちゃうの。それに、子供のことも考えてやらなくちゃ。こんな人が父親じゃ、好い影響あるはずないじゃない。

コンスタンス あら、ジョンはこれまでずっと、父親として素晴しかったわ。その点は認めてあげましょうよ。

カルヴァー夫人 コンスタンス、おまえ、あんまり頑になっちゃいけないよ。苦々しい気持でいるのは解るけど、だからって、判断を誤っちゃいけない。後で悲しむことになりますよ。

コンスタンス 母さん、わたし苦々しい気持なんて少しもないわ。そんな風に見えて？ わたし、申し分ない気分なだけけど。

カルヴァー夫人 母さんの目は誤魔化せませんよ。今おまえがどんなに憤慨してるか、母さんには分かりすぎるほど分かってます。こんなことになったんだもの、憤慨して当然です。

コンスタンス 憤慨って？ わたし、どんなに心の中を覗いても、憤慨なんて、これっぽちも見つからないわ。何てお馬鹿なんだろう、人に見つかるような遣り方をして、って気持以外。

ジョン コンスタンス、自己弁護したいわけじゃないけど、ぼくはぼくなり、人に判らないようにって努力はしたんだ。天使だってあれ以上はできなかつたさ。

コンスタンス ただ、天使にはストリートカットの煙草を吸うっていう、悪しき習慣はないのよね。ジョン きみも一旦あの味を覚えたら、病みつきになるさ。エジプト煙草なんか比じゃないんだから。

カルヴァー夫人 コンスタンス、皮肉はおよしなさい。傷ついた心を慰めるには最悪のやり方ですよ。さあ、母さんの腕の中に来て、一緒に泣きましょう。そうすれば心が晴れます。

コンスタンス 優しい母さん。でも、わたし、涙なんて一滴も出ないわ、いくらその涙にわたしの命が懸かっているって言われたって。

カルヴァー夫人 それに、頑になっちゃいけない。正直、悪いのはジョンですよ。それは認めます。

なんたって、やっちゃいけないことをやったんだから。でも、男っていうのは元々弱いものなんです。それに女だって、どっちもどっち、いいかげん恥知らずなんです。ジョンは、今度の件では、深く反省しているはずですよ。

マーサ よく解らないのは、どうして、義兄さんが浮気してるって判った時すぐに何もしなかったのかってこと。

コンスタンス 正直言って、わたしには関係ないことだと思っただから。

マーサ (怒って) でも、仮にも姉さんはこの男の妻じゃない。

コンスタンス ジョンとわたしはとっても運の好い人間だと思っただけ。わたしたちの結婚は理想的なものだったわ。

マーサ どうして。

コンスタンス 最初の五年間、わたしたち、お互いに夢中だった。それって、大抵の人たちよりずっと長いと思わない？ まあ、ハネムーンが五年続いたってこと。で、その後、もう幸運としか言いようがなかった。だって、わたしたち、相手に飽きたのが同時だったんですもの。

ジョン そんなことない。コンスタンス、ぼくはこれまでずっとときみを愛し続けてきた。

コンスタンス そうじゃないとは言っていないわ。あなたがわたしを愛してはいることは充分わかってる、

或る意味で。わたしも或る意味であなたを愛してる。趣味は合うし、一緒にいてうれしい。あなたが社会的な成功を収めればわたしも嬉しいし、わたしが病気になるればあなたは心から心配してくれる。一つの冗談と一緒に笑って、一つの気苦労と一緒に溜息を吐く。こんなに純粹な愛情で結ばれた夫婦はいないと思う。でも正直に言って——あなた、この十年わたしに夢中だった？

ジョン 十五年も結婚生活が続けば……

コンスタンス ねえ、あなた、言い訳はいらないの。正直な答が欲しいの。

ジョン 何だ彼だ言っても、やっぱり、ぼくが付き合ってた楽しいのはきみだ。きみ以上に好きな女性、きみ以上に可愛い女性はいない。きみが百歳になっただって、ぼくは同じことを言うね。

コンスタンス でもあなた今でも、階段にわたしの足音がただけで心がときめく？ 部屋に入ってきたら、その遅い腕で抱きしめたという衝動に駆られる？ そんな風には見えないけど。

ジョン そんなみつともないことできないよ。

コンスタンス それで質問に答えたことになるわ。あなたはわたしを愛していない、わたしがあなたを愛していないのと同じ意味で。

ジョン きみ、そんなこと今まで一度も言ったことないじゃないか。

コンスタンス わたし、いろんなことを喋りすぎる夫婦が多すぎると思うの。夫婦の間では、二人ともよく分かっているはず、分からない風をしていた方が賢明だということもあるんじゃない？

ジョン ぼくが前ほどきみを愛していないって、どうして判ったの？

コンスタンス それはね……、ある晩、あなたとダンスをして不図気づいたの、——いつもみたい

に息の合ったステップを踏んでいないって。わたし他のことを考えてたのよね。横で踊ってる女性の髪型が素敵だな、自分にも似合うかしらって。で、あなたを見ると、あなたは、なんて素敵な脚をしているんだ、この女性は、って思っているのが判った。その瞬間、ああ、この人はもうわたしを愛していないんだって、はつきり意識したの。と同時に、救われたっていう気持もあった。だって、わたしも前のようにあなたを愛していなかったんですもの。

ジョン ぼくはそんなこと一度も考えたことないな。

コンスタンス でしょうね。男の人って、男が恋から冷めるのは極く当り前のことだと思っているくせに、女も同じように恋から冷めることがあるなんて考えもしない。あなた、気を悪くしないで。それって、男性の愛すべき限界の一つなのよ。

マーサ つまり、姉さんは、それ以来義兄さんが次から次へと浮気をして、眉一つ動かさなかったってこと？

コンスタンス ねえ、マーサ、浮気が露顕したのは今回が初めてなんだから、疑わしきは罰せず。これが最初で、それ以前は貞節という厳しく且つ狭い道から滑り落ちたことはなかったってことにしてあげましょうよ。ジョン、わたしのこと、怒ってないわよね？

ジョン うん。怒っちゃいない。ただ、ちよつと面喰らってる。どうもぼくは虚仮にされてきたような気がする。きみの気持がそんなに変わってたなんて、夢にも思わなかった。でも、ぼくがそれを好ましい変化だと思ってる、とは考えないでくれ。

コンスタンス まあまあ。理性的になつて。あなただって、まさか、願ってはいないでしょ？——こ

の十年わたしに落ち込んだままでいてほしかった、あなたへの望みのない恋心を持ち続けてほしかった、なんて。あなたが与えられるものといったら、優しい友情だけだったんですもの。考えてみて——もしも自分がちつとも夢中になれない相手があなたに夢中になってるとしたらどうか。きつとうんざりするだけよ。

ジョン きみにうんざりするなんて、考えたこともないな。

コンスタンス (投げキスをして) ねえ、分かるでしょ？ わたしたちは幸運な星の下に生まれた。神様に愛されてる夫婦なの。そのことに感謝しなくっちゃ。あなたに夢中だった五年間、あなたもわたしに夢中だったあの五年間、わたし、あの幸せを決して忘れないし、これからもずっとあなたに感謝する。あなたがわたしに恋してくれたからじゃない。そうじゃなくって、あなたがいたからわたしも恋ってものを経験できたから。それに、わたしたちの恋は、情性に流されずなんです。どちらか片方だけが相手に夢中のままだったら必ず起こる喧嘩とか、非難の応酬とかを経験しないですんだ。わたしたちの恋が同時に冷めたからよ。クロスワードパズルの最後の単語を二人が同時に思いついたように。だから、それからも仕合せに暮らしてこられた。わたしたちの結婚生活は完璧だった、——そうじゃない？

マーサ じゃあ、姉さんは、義兄にいさんがマリー・ルイズと浮気してるって判っても、どうでもよかつたって言うの？

コンスタンス 人間の性質って不完全なのよね。最初はわたしも腹が立った、口惜くやくしいけど、それは認める。でもちよつと考えて、こう思ったの——自分が何も必要としてないものをジョンが他の

誰かにあげたからって、それで憤慨するのは理に適ったことじゃない。インソップ物語に出てくる飼葉桶かいばづつの中に座り込んで馬に餌をやるうとしなかった犬わんと同じじゃないかって。それにわたしはジョンが好きだから、ジョンがジョンなりのやり方で幸せになることに特に異存はなかった。たとえ色恋に耽溺たんじくしたとしても……ジョン、"耽溺"って言い方でいい？

ジョン 果たして"耽溺"というところまで行つてたかどうかはよく判らないけど……。

コンスタンス まあ、とにかく、逆さか上のぼせている相手がわたしの友達だったってことは有難かつたわ。だって、母親が子供の悪戯を見張るみたいに、見張っていられるでしょう。

ジョン そりゃそうだ。

コンスタンス マリー・ルイズはとっても可愛いでしょ、だからわたしの自尊心が傷つけられることもないし、お金は充分持つてるから、ジョンが散財して困るってこともない。頭はあんまり良くないから、ジョンに変な思想を植え付けることもないでしょう。わたしがジョンの心を掴んでいる限り、感覚にうったえるものはマリー・ルイズに任せたっていいじゃないか、そう思ったの。ジョンがわたしを騙したいと思って、仮に——仮によ——誰にやら騙されてもいいかって訊いてきたら、わたし、やっぱりマリー・ルイズを一番あに挙げてたと思う。

ジョン コンスタンス、きみはそんなに騙されちゃいなかった、——ぼくにはそう思えるね。きみは凄いい洞察力の持主だ。その眸で見られると、なんだか素っ裸で震えてるみたいなきがする。

カルヴァー夫人 コンスタンス、おまえのその態度には納得できません。あたしが若かつた頃は、夫が浮気してるって判ったら、妻は涙に暮れて実家に戻ったものですよ。で、三週間ばかりはそこ

に居て、それで、夫が惨めな気持ちになって、申し訳なかったって、それ相応に謝ってくるまでは家に帰らずにいたものです。

マーサ 姉さん、姉さんはこの人と離婚するつもりはない、そう理解していいの？

コンスタンス ねえ、マーサ、夫が浮気をしたからって、どうして離婚しなくちゃいけないの？ 気の持の良い家と、それなりの収入と、それに自分じゃあんまりやりたくない仕事を進んでやってくれる召使を、どうして捨てなくちゃいけないの？ それって、自分で自分の鼻を削いで、二度と見られない顔にしまおうのと同じなんじゃない？

マーサ もう！ 何言ってるの！ それなりの気概を持った女性なら、こんな風に夫に虚仮にされるのを、黙って見過ごすことはできないはずよ。

コンスタンス この人は悪人じゃないし、悪人にはなれないわ。馬鹿なだけ。でも、ねえジョン、人間、馬鹿だって言われるよりは、悪い奴だって言われる方がまだましなんじゃない？ 少なくとも悪人は退屈じゃないし、それに矯正のしようもある。でも、馬鹿につける薬はないでしょう。

ジョン ぼくは馬鹿だった。コンスタンス、それは自分でも分かっている。でも、ぼくだって経験から学ぶことはできる。だから大馬鹿にはならないつもりだ。

コンスタンス これからは証拠を残さないように注意するってことね？

カルヴァー夫人 違いますよ、コンスタンス。ジョンが言いたいの、これを教訓にして、これからは非難されるようなことはしませんってことですよ。

コンスタンス わたし、これまでいろんな男性を見てきて判ったんだけど、火遊びが楽しめというよ

りも重荷に感じられる年齢になるまでは、男はそれを止めようとしなれないものなの。ジョンはその点でまだまだ人生の盛りよ、嬉しいことに。あと十五年は大丈夫だわ。そうでしょ、ジョン？

ジョン ねえ、コンスタンス、今だけじゃなくて、時々きみの言っていることが分からないことがあるんだけど……。

コンスタンス つまり、マリー・ルイズの後継者はまだまだ一人や二人じゃないだろうってこと。

ジョン コンスタンス、ぼくは名誉にかけて誓うが……

コンスタンス (彼の言葉を遮って) あなたにできるのは誓うことくらいでしょうね。でもわたしには何の役にも立たない。ねえ、あなた、あなたが何をしようよと、わたしが知らん振りをしている間は二人とも完璧に仕合せだった。あなたは楽しめたでしょうし、わたしは、夫からひどい扱いを受けてる妻として大いに同情を博してた。でも、今のわたしの立場は、かなり難しいものよ。あなたのお蔭で、優雅な奥方を演じることも、威厳ある妻を演じることもできなくなっちゃったんだから。

ジョン 申し訳ない。

マーサ 姉さん、この男と別れるの？

コンスタンス いいえ、そのつもりはありません。ジョン、あなた憶えてて？——バーバラと一緒に室内装飾の仕事をしなかって誘ってくれたこと。わたし、気が変わった。あの申し出を受けることにする。

ジョン でも、何故？ どうも要点が掴めないな。

コンスタンス これ以上あなたに頼りつきりであるつもりはないってこと。

ジョン でも、コンスタンス、ぼくの様子はみんなきみに渡してらんだから、好きなように使えばいいじゃないか。ぼくにとっちゃそれが喜びなんだ。欲しい物はどんどん買ってさ、——きみはあんまり物を欲しがらないけど……。

コンスタンス 分かっている。ねえ、ジョン、これまでわたし、無理をお願いしたことある？ だから、今回は反対しないで。わたしがやりたいなって思うことをやらせてほしいの。

暫し間がある。

ジョン 気持は良く解る、というわけじゃ全然ないけど、でも、まあ、きみがそう決めたんなら、反対はしないよ。したいようにしたらいい。

コンスタンス さすが、あなたただわ。じゃあ、患者さんのところに戻って。さもないと、わたし、自分のだけじゃなく、あなたの生活費まで稼がなくなっちゃならなくなる。

ジョン キスしてくれるかい？

コンスタンス ええ、もちろん。

ジョン (彼女にキスをして) 平和条約締結ってとこかな。

コンスタンス 平和友好条約。(ジョンは出て行く。) ジョンって優しい。そう思わない？

カルヴァー夫人 おまえ、何を考えているの？

コンスタンス わたし？ (からかうように) 母さんはどう思ってる？

カルヴァー夫人 その顔付きは気に入らねえ。

コンスタンス そう？ 残念だわ。大抵の人は人並み以上だと言ってくれるんだけど。

カルヴァー夫人 おまえは何か、とんでもない悪戯いたづらを考えてるようだけど、それが何なのか……。

マーサ バーバラと一緒に働いて何が期待できるっていうの。

コンスタンス 年千ポンドから千五百ポンド。

マーサ お金のことじゃない。分かっているくせに。

コンスタンス 現代の主婦業主婦業のものにちよつと飽きてきたの。

マーサ “現代の主婦業”って、それどういうこと？

コンスタンス 契約した品物を届けない娼婦。

カルヴァー夫人 なんてことを！ 父さんが聞いたら何て言うことか！

コンスタンス ねえ、母さん、父さんならどう言ったかなんて、考えてもしようがないでしょう。二十五年も前に死んだんだから。それに、父さんには当意即妙、相手を遣り込める才能なんてなかったんじゃない？

カルヴァー夫人 全然なかった。父さんは善い人でした。でも、馬鹿だった。だから神様に愛されて、若くして天国に召されたんです。

バーナード・カーサルがドアを開け、顔を出す。

バーナード 入ってもよろしいですか？

コンスタンス ああ、やっと来てくれた。どうしちゃったのかと思ってたのよ。

バーナード あの人が、玄関先に停めてあったわたしの車を見て、送ってほしいと言うので、それで、……うまく断れなくて。

コンスタンス で、家まで送ってあげたのね。

バーナード いや、それが。こんな状態では家には帰れない、美容院に寄って髪を整えたいと言うので、ボンドストリートまで。

コンスタンス 何か言ってた？

バーナード わたしのことをどう思うか、と訊かれました。

コンスタンス 大抵の女が訊くことね——相手が何て答えても全く気にならない時に。それで、あなたは何て？

バーナード 自分には関係ないことに意見を述べるのは差し控えたいと。

コンスタンス さすが！ あなたの好いところは、どんな状態に置かれてもあなたらしさを失わないってこと。たとえ空が落ちこちてきても、あなたは完璧なイギリス紳士のままでいるでしょうね。

バーナード ああ答えるのが一番無難だろうと思ったので。

コンスタンス さてと、母さん。これ以上引き留めないわ。母さんもマーサも、することがいっぱいあるんでしょ？

カルヴァー夫人 そうだった。思い出した。さあ、マーサ、帰りましょう。さよなら、コンスタンス。

さよなら、カーサルさん。

バーナード さよなら。お気をつけて。

コンスタンス (マーサに) さよなら、マーサ。いろいろと心配してくれてありがとう。あなたは困ったとき本当に助けになるわ。

マーサ もう、姉さんったら！ わたし、姉さんって人が解らない。解る、と言ったところで意味ないでしょうけど。

コンスタンス まあまあ……。じゃあね。(カルヴァー夫人とマーサは出て行く。バーナードがドアを開け、二人が出て行った後それを閉める。) だいぶ遅刻？

バーナード これだけ遅れたら、もう少々遅れても大差ありません。実は、一つ、とても大切なことを申し上げたいのですが……。

コンスタンス (ちよつとからかうように) 大切なのはわたしにとって？ あなたにとって？

バーナード あのひどいことが起こった時どんなに困惑したか、言葉になりません。

コンスタンス でも、結構面白い場面もあったと思いませんか？

バーナード このことを知ったのは、つい先刻さきだったのです。あの時は、あなたも知っていらつしやるとは考えもしなかった。知っていて、ずっと笑顔で耐えていらつしやったとは、なんと気高いお心。以前からあなたを称讃していましたが、今はその何倍も何十倍も称讃しています。

コンスタンス バーナード、あなたって、優しい。

バーナード あなたが経験した苦しみ、それを思うと、胸が張り裂ける思いです。

コンスタンス 人の不幸を気にかけてすぎるのはあまり好いことじゃないと思いますけど。

バーナード まだ一時間にもならないでしょうが、先程わたしは、もしできることがあれば、どんな

ことでも喜んでさせていたたくと申しました。あの時は、その機会がこんなにも早くおとずれようとは思っていませんでした。もはや、この胸を焦がす思いを抑えておく必要はないと思います。

ああ、コンスタンス、わたしのもとに来てください。お分かりいただけると思いますが、もしあなたとジョンとの間が、これまで考えていたようなものであったなら、こんなことを申し上げることは絶対になかった。しかし今、ジョンにあなたを夫たる資格はない。ジョンはあなたを愛してはいない。ああした辱めはづかしを与える男と一緒に暮らすことで人生を無駄になさってはいけません。

あなたはわたしはずっと心からあなたを愛していたことをご存じです。ですから、わたしを信頼して大丈夫だということもご存じのはず。わたしは命懸けで、あなたがこれまで耐えてこられた苦しみを忘れられるよう努めます。コンスタンス、わたしと結婚してくれませんか。

コンスタンス ねえ、バーナード、ジョンのやったことはひどいことかもしれない。でも、あの人、まだわたしの夫なのよ。

バーナード 名ばかりの……。あなたは醜聞スキャンダルを防ごうとあらゆることをなされた。だから、離婚したいと言えば、ジョンは同意せざるをえないでしょう。

コンスタンス でも、ジョンのしたことはそんなにひどいことだと、ほんとにそう思う？

バーナード (驚いて) まさか、マリー・ルイズとの関係が本当かどうか疑っているとおっしゃる

のではないでしょう？

コンスタンス それはないわ。

バーナード では、一体、どういうこと？

コンスタンス ねえ、バーナード、裕福な階級の結婚ってどんなものか考えたことある？ 労働者階

級なら、妻は夫のために食事を作って、洗濯をして、靴下の継ぎ当てもする。子供達の面倒を見て、子供の着る物は自分で拵としらえる。つまり、自分の生活費に見合っただけの労働を提供してること。でも、わたしたちのような主婦はどうかしら？ 家のことはみんな召使がやってくれる。

子供は——もちたいと思えばの話だけ——乳母が面倒見てくれるし、大きくなったら寄宿学校へ送り込んじやえばいい。ねえ、よく考えてみて。これって愛人と変わらないんじゃない？

ただ違うのは、男の欲望を利用して結婚して、法律で縛って、男が自分に欲望を感じなくなったとき捨てられないようにしてること。

バーナード しかし、妻とは、夫の良き友人であり、協力者でもあるんじゃないですか？

コンスタンス ねえ、分別のある男なら、ブリッジをしたくなったら倶楽部でするわ——奥さんと一緒にじゃなくってね。ゴルフなら女より男と一緒にする。そうじゃなくって？ 協力者ってこと

なら、愛すべき奥さんより、お金で雇った秘書の方がよっぽど役に立つ。つまり、諸々のこともろもろを考えてみると、わたしたちのような主婦って寄生虫に過ぎないのよ。

バーナード その意見には賛成できません。

コンスタンス バーナード、かわいそうに、あなたはいま恋をしているから、判断力が鈍ってるのよ。

バーナード おっしゃることが分かりかねます。

コンスタンス ジョンはわたしに食べる物と住む所を提供してくれている。着る物を買うお金もね。それに、劇を観たりコンサートに行ったりするお金。車も。つまり、世間体を整えるための全てを提供してくれてるってわけ。じゃあ何故そうしなくちゃならないかって言うと、十五年前にわたしに夢中になって、わたしを引き受けたから。でも、ジョンだって、もしあのころ誰かに訊かれたら、恋ほど移ろい易いものはない、これほど気狂いじみた感情はない、それは充分わかってるって答えたはずよ。あの時ジョンがわたしと結婚したのは、よっぽど気前が良かったか、よっぽど分別がなかったかのどちらか。でも、バーナード、あなた思わない？——気前の良さか、それとも先見の明の欠如かは判らないけど、わたしが今でもそれを利用するのは狡ずいって。

バーナード 何故？

コンスタンス ジョンは或る物を、それ以上安くは買えないから、大金を叩たたいて買った。でも今はもう、それは要らない。そのことに、わたし腹を立てるべきかしら？ わたしにもよく分かってる——性的な欲望がどんなに移ろい易いものか。それは突然やって来て、突然去ってゆく。誰にも何故かは解らない。確かなのは、一旦去ってしまったらそれは永遠に戻らないってこと。ジョンがわたしの必要としているものを提供してくれている以上、浮気をしたからって、不平を言う権利はないと思うの。ジョンは玩具おもちゃを買った。でも、もうその玩具で遊ぶ気はなくなった。なら何故その玩具で遊ばなくちゃならないの？ お金を払ったのはジョンなんですから。

バーナード 男は自分のことだけ考えていればいい、というのなら、それで結構なのかもしれません

が、でも、相手の女性はどうなるんです？

コンスタンス そんなに心配してあげる必要はないと思うわ。わたしが結婚したのも、他の大抵の女の子と同じように、わたしの前に開かれた道の中では結婚が一番簡単で、見苦しくなくて、有利な職業だと思ったから。結婚して十五年経たった女が夫の浮気を発見したとき傷つくのは、大抵、心じやないわ、虚栄心よ。分別のある女なら、そうしたことは或る意味で必要悪なんだって考える。だって、他の点では主婦業って気楽で楽しい職業ですもの。

バーナード ということは、つまり、あなたはわたしを愛してはいない……。

コンスタンス わたしの人生に対する考え方は馬鹿げていると？

バーナード 馬鹿げているものにも。わたしがあなたを熱愛するほどには、あなたはわたしのことを思っていない、だから、そんなことがおっしゃれるのでしょう。今でもジョンを愛しているのですね？

コンスタンス ジョンのことは大好きよ。笑わせてくれるし、それに、とっても馬が合うの。でも愛しているとは言えない。

バーナード で、あなたにとってはそれで充分だと？ 将来を考えた時、それでは寂しくはありませんか？ 愛が欲しいとはお思いになりませんか？

暫しの間。コンスタンスは考えるようにバーナードを見つめる。

コンスタンス (魅力たっぷりにも) もしそうだったら、あなたのところへ行くわ。
バーナード コンスタンス、それは……? わたしを愛してくださるといふことで? ああ、コンスタンス、わたしは、あなたの足跡あしあとでも宝物にする。

彼はコンスタンスを抱きしめ、情熱的にキスをする。

コンスタンス (彼から身を離しながら) バーナード、そんなに慌てないで。わたし、生活をジョンに頼ってる以上、あの人を裏切ることにはできない。そんなことしたら、自分で自分を軽蔑する。バーナード でも、わたしを愛していただくなら……。

コンスタンス 愛しているとは言ってませんわ。また、たとえ愛していたとしても、暮らしてゆくのに必要なものをジョンに頼っている以上、あの人を裏切ることにはできません。要するに、これはわたしの経済状態の問題なの。ジョンはわたしの貞節をお金で買った。だから、その品物を届けなかったらわたしは娼婦よりひどい人間、ということになってしまう。

バーナード では、わたしには希望が全くないということでは?

コンスタンス 差し当たってあなたが希望できることは、……試合が終つちやう前に、わたしをラニラへ連れてってくれること。

バーナード まだポロを見たいんですか?

コンスタンス ええ、見たいわ。

バーナード 分かりました。(情熱的に) ああ、愛してる。

コンスタンス じゃあ、すぐに下へ行って、車が動くようにしておいて。ラジエターにちよつと油を注ますとか何とか。わたしもすぐ行く。でもその前にちよつと電話したいの。

バーナード 分かりました。

彼は出てゆく。コンスタンスは電話をとる。

コンスタンス メイフェアの二六四六。……バーバラ? コンスタンス。あなたが二週間前に言ってくれたこと、あれ、今でも有効? ……そう、じゃあ、やらせていただきたいの。……いいえ、そうじゃない。何もなかったわ。ジョンは元氣よ。いつもどおり優しいわ。ただ、自分の生活費を自分で稼いでみたくなったの。いつから始められる? 早いほど有難いんだけど。

〔幕〕

場面は同じ。一年が経過している。午後。

コンスタンスが机に向かって手紙を書いている。執事がバーバラ・フォーセットとマーサを案内してくる。

ベントリー フォーセット様、それにカルヴァア様です。(退場。)

コンスタンス あら、二人揃って。座って。もうちよつとで終わるから。

バーバラ マーサと玄関前でばったり。

マーサ 旅行の準備で何か手伝うことはないかなって。

コンスタンス ありがとう。でも、特にないわ。もう準備万端。今までだって忘れ物をしたことなんてない、結局一度も使わずに持って帰るものことだけだ。

バーバラ さよならを言わなくちゃと思っただけ、急いで来たの。

コンスタンス ねえ、バーバラ、仕事を疎かにしちゃいけないわ。わたしが出発したらすぐ再開ね。

バーバラ 実は、ここへ来たのは一つには仕事の件なの。新築の家にイタリヤ風の部屋が欲しいって

いう注文が入ったのよ。

コンスタンス 何だか曰くありげな目つきね。

バーバラ ふと思いついたんだけど、どうせイタリヤへ行くんなら、ついでに家具のお店を廻って掘出し物を見つけてきてくれないかなって。

コンスタンス やめて。この一年馬車馬みたいに働いたのよ。昨日六時に商売道具は片付けた。汚れた上っ張りを脱いで、額の汗を拭いて、堅くなった手の皮をこしこし擦ったの。あなた、六週間休みをくれるって言ったじゃない。

バーバラ ええ。あなたはそれに見合うだけの働きはしてくれました。

コンスタンス 昨夜お店のドアを閉めた時、わたし、労働者を止めて、完璧なイギリスの淑女に戻ったの。

マーサ 姉さんがこんなにご機嫌なのって、見たことない。

コンスタンス やるべきことはやり終えたし、やれることはみんなやったから。だから今日から六週間は一切何も考えない——壁紙はどんなのが好いか？ キッチン床は？ シンクは？ 浴室は？ カーテンは？ クッションは？ 冷蔵庫は？——そういうのはみんな忘れるの。

バーバラ どうしてもってわけじゃないんだけど、鮮やかな色の家具を幾つかと、鏡台を一つ二つ手に入れてほしいのよ。

コンスタンス お断り。わたしこれまで一所懸命働いてきた。まアそれなりに面白かったけど。でも、今日からは純粹に休暇を楽しむの。

バーバラ　じゃあ、しょうがないわね。せいぜい楽しんできて。

マーサ　姉さん、姉さんが知っておくべきだと思うことがあるんだけど。

コンスタンス　また？　マーサ、あなたも、そろそろ分かってもいいんじゃない？——わたしは自分が知っておくべきことは大抵知ってるの。

マーサ　でも、お昼前にボンドストリートで誰と遇ったかは知らないでしょう。

コンスタンス　推測はつきまーす。マリー・ルイズじゃない？

マーサ　どうして……？

コンスタンス　がっかりさせてごめんさい。一時間前にマリー・ルイズから電話があったの。

マーサ　あの人あと一月はイギリスに戻らないと思ってたのに。一年の予定じゃなかった？

コンスタンス　昨夜戻ったの。もうすぐ来るわ。

マーサ　えっ、ここに？

コンスタンス　ええ。出発する前にちよつと会いたいわ。

マーサ　どういうこと？

コンスタンス　別にどうってことじゃないと思うわ。マリー・ルイズって優しいと思わない？　イ

ギリスに帰ったばかりなのよ、何かと忙しいはずなのに。

バーバラ　いろんな国を廻ってたのよね？

コンスタンス　ええ。最初がマラヤ。マラヤはモーティマーが仕事の関係で行きたいって言ったらしいわ。次は中国。で、最後はインド。

マーサ　わたし、思ってたんだけど、二人が旅行に出掛けたのは、姉さんが提案したからじゃないかなって、……一年の長旅だし、それに例の出来事のすぐ後だったし。

コンスタンス　あなた、本当は大いに楽しんでたんじゃない？

バーバラ　確かに旅行は正解だった。ああするのが二人にとって一番だったんじゃないかしら。

マーサ　姉さんのことは姉さんが一番よく分かっているはずだから、言ってもしょうがないかもしれないけど、よりにもよってマリー・ルイズが帰ってきた時、六週間も家を留守にするなんて、ちよつとまずいんじゃない？

コンスタンス　わたしたち働く女は、休暇は取れる時に取っておかなくちゃ。

バーバラ　きつとジョンも去年の経験から充分学んだでしょうから、同じ間違いを犯すことはないでしょうよ。

マーサ　ジョンがマリー・ルイズと戯れ合うことはもうないって、姉さん、ほんとにそう思う？
コンスタンス　さあ、何とも言えない。でも、ほら、ジョンが来た。本人に訊いてみたら？

そう彼女が言っている間に、ジョンが入ってくる。

ジョン　何を訊きたいんだって？

マーサ　（少しも慌てることなく）姉さんが留守の間、義兄さん何してるだろうかかって。

ジョン　仕事はいくらでもあるし、暇な時には倶楽部へ行くさ。

マーサ 姉さんと一緒に休暇が取れなくてお気の毒。

バーバラ わたしを責めないでよ。わたしはコンスタンスの希望に合わせたんだから。

コンスタンス ねえ、わたし、とにかくイタリアに行きたかったの。大陸でジョンの好きな場所って言ったら、イギリスと大差ない所ばかりなのよ。自分が他所よその国にいるって実感するには、かなりの想像力が必要な場所ばかり。

マーサ ヘレンはどうするの？

コンスタンス 八月はヘンリー・オン・テムズに別荘を借りて、連れてくつもり。ジョンはゴルフや船遊びができるし、わたしもあそこならロンドンのお店へ通えるから。

バーバラ では、と。わたしは帰る。存分に楽しんできて。あなたはそれだけの働きはしてくれた。

ねえ、ジョン、わたしって賢いと思わない？——コンスタンスに仕事をするように勧めたのはわたしなのよ。本当に良くやってくれてる。掛替えのない人。

ジョン あの時も賛成じゃなかったし、今も同じ気持ちだね。

バーバラ まだ赦してくれないってわけ？

ジョン コンスタンスがどうしてもって言うから……、気に入らないけど、まあ、それなりに良い方に考えようとしたんだ。

バーバラ じゃ、さよなら。

コンスタンス (彼女にキスをして) さよなら、元気だね。

マーサ じゃあ、わたしも一緒に帰る。母さんがさよならを言いにとちょっと寄るつもりだった。

コンスタンス そう、分かった。じゃあね。

彼女はバーバラとマーサとにキスをして、ドアの所まで二人について行く。バーバラとマーサは退場。

ジョン ねえ、コンスタンス、この時期に休暇を取るのには、バーバラの都合だと思ってたよ。

コンスタンス わたし、そう言ったかしら？

ジョン 確か。

コンスタンス そう？

ジョン もしぼくの都合に合わせて休暇が取れるって判ってたら……

コンスタンス (彼の言葉を遮って) 夫婦と一緒に休暇を取るのには間違ってると思わない？ だって、何のために休暇を取るかって言えば、からだ身を休めたり、気分転換して楽しんだり、要は普段とは違う環境の中に自分を置くためでしょ？ 男の人だって、奥さんと一緒に窮屈でしょう。

ジョン 相手次第だね。

コンスタンス わたし、ホテルの食堂に座ってる夫婦を見ると辛くなっちゃうの。みんな、小っちゃなテーブルを挟んで黙りこくってるんですもの。

ジョン そうばかりでもないさ。なかには陽気にお喋りしてる夫婦だっている。

コンスタンス 確かに。でもその「奥さん」の指を飾ってる結婚指輪をよく観察してみると、何と

なく据り心地が悪そうだつてことない？

ジョン　ありがたいことに、ぼくらは相性が良かった、ずうっと。そうだろ？　それに、きみの指に結婚指輪を嵌めたとき式を司つてくれたのは、主教練だったんだよ。コンスタンス、まさかぼくが退屈だつて言うんじゃないだろう？

コンスタンス　退屈どころか、死ぬほど笑わせてくれる。でも、わたしと一緒にいてくれる時間が長すぎるように思ったの。だから、一月くらい一人にしてあげたら、好きなことができて気分転換になるんじゃないかなつて。きつとわたしの持つて生まれた不幸な性質のせいね、――謙虚さつていう。

ジョン　またまた、うまいことを言う。また一杯食わせるつもりのようにだけど、そんなにしょつちゅう一杯食わされてたんじゃ、太鼓つ腹になっちまうよ。

コンスタンス　なんにしても、もう遅すぎるわ。荷物は鞆に入れちゃったし、出発の挨拶は済ませちゃったし。皆んな、わたしがこの先一月はいないつてもりで朝を迎えたら、実は相変らずここにいました、なんていうんじゃないや迷惑でしょう。

ジョン　ふーむ。まあ、何とも言えるさ。ところで、コンスタンス、ちよつと言つておきたいことがあるんだ。

コンスタンス　そう？

ジョン　マリー・ルイーズが帰ってきたことは知ってるだろ？

コンスタンス　ええ。出発する前に会いたいわつて。そのうちここに来るわ。久しぶりだもの、わたし

もマリー・ルイーズに会いたかつたの。

ジョン　そこで、一つ頼みがあるんだ。

コンスタンス　なに？

ジョン　きみはこれまでずうっと、素晴らしい妻だった。……ええい、此畜生！　それに比べてぼくは……。ぼくは、きみの人の善さにつけ込んでんじやいけないと思うんだ。だから、ここは正直にいきたい。

コンスタンス　何が言いたいのがよく分からない。

ジョン　モーターイマーがここに来て、あのみつともないことをしでかした日から、ぼくはマリー・ルイーズには一度も会つてない。彼女がイギリスを出てから、かれこれ一年になる。で、あれやこれや考えてみると、やつぱり間違いだと思うんだ、――前みたいな関係に戻るのは。

コンスタンス　マリー・ルイーズがそう願つてると思うの？　何故？

ジョン　帰つてきてすぐここに電話してきただろう、なんだかイヤな予感がするんだ。

コンスタンス　イヤな予感？　ねえ、あなた、電話を見たら受話器を取らずにいられない人つているのよ。受話器を取れば、何番におかけしますかつて交換手に訊かれる。だから何か言わなくちゃならないでしょ？　きつと、マリー・ルイーズの頭に最初に浮かんだのがこの番号だったのよ。

ジョン　彼女がぼくに首つ丈だつてことは事実なんだ。

コンスタンス　そうね。でも、だから責めることはできない。でしょ？

ジョン　冷たくしたいわけじゃないけど、あんなことがあつて二人の関係は一応終わったんだから、

このままにしておく方が良いと思うんだ。
コンスタンス どうぞ、お好きなように。

ジョン ぼくは自分のことを考えてるんじゃない。一つにはマリー・ルイズのこと、それに、何よりきみのことを考えてるんだ。彼女との関係が完全に終わらない限り、きみの顔を真面に見られない。
ない。

コンスタンス こんなに害がなくって、お金が掛からない楽しみをなくすのは勿体なくない？

ジョン 勿論ちよつとは辛いだろうけど、でも、決めたらすぐ実行するのが賢明だと思うんだ。

コンスタンス それはそうね。じゃあ、こうする、——マリー・ルイズが来たら、わたし、何か言い訳を拵えて、すぐに部屋を出る。そうすればあなたたち二人つきりになれるでしょ？

ジョン そういうことじゃないんだ。

コンスタンス あら？

ジョン こういうことは、男より女の方が上手くやれるような気がするんだ。きみの口から言ってくれたらなって考えてたんだけど。

コンスタンス そういうこと……。

ジョン その方が簡単な気がする。ぼくの口からだ、と、上手くいかないんじゃないかと思う。きみは、こんな時どう言ったらいいかよく分かっているようだし、それに妻としての体面もあるだろう？

要は、彼女がぼくのことを諦めるか、それとも、きみがカンカンに怒り出すかのどっちかだっけ解らせてほしいんだ。

コンスタンス でもわたし根が優しいから。マリー・ルイズが泣き出して、諦めきれないって言うたら、きつと同情しちゃう。同情して、じゃあ、これからも付き合ったらいい、って言っちゃうに決まってる。

ジョン コンスタンス、そんなひどいこと、しないだろ？

コンスタンス わたしが一番心にかけてるのは、あなたの幸せ。

ジョン (暫し躊躇った後) コンスタンス、正直に言うよ——ぼくはマリー・ルイズに飽き飽きしたんだ。

コンスタンス どうしてそれを最初に言ってくれないの？

ジョン 頼むよ、コンスタンス、分かるだろ？——こんなこと女性に対つて言えることじゃないって。

コンスタンス まあ、そうね。マリー・ルイズみたいな人が、"はい、分かりました" って大人しく聞き入れられるようなことじゃないわよね。

ジョン 女つてのは可笑しなもので、自分が男に飽きた時には平気で、"気に入らなくなっちゃった" ないでしよう、飽きちゃったんだから" っと言うくせに、男からそう言われると、やれ" "あなは獣だ" "五右衛門風呂で釜茹にしたってまだ足りない" なんて言うんだな。

コンスタンス 分かった、任せといて。何とかする。

ジョン やっぱりきみは素晴らしい人だ。でもできるだけ穏やかに頼むよ。マリー・ルイズを傷つけないんだ。分かるだろ？ 彼女、子供みたいなんだから。

コンスタンス それに、とっても可愛いわ。

ジョン 辛いだろうな。

コンスタンス ペちゃんこになっちやうかもね。

ジョン リア王じゃないけど、ぼくが、自分が犯した罪以上に罰せられてるってことも伝えてほしいな。(注7)あまり悪く思われたくないから。

コンスタンス でしょうね。

ジョン でも、これに完全にお終しまいだってことはしっかり伝えといて。

コンスタンス 任せてちょうだい。

ジョン 有難い、コンスタンス、やっぱりきみだ。きみ以上の妻はいないよ。

執事がマリー・ルイーズの来訪を告げる。

ベントリー ダラム夫人でいらっしやいます。(退場。)

マリー・ルイーズとコンスタンスは暖かな抱擁を交わす。

マリー・ルイーズ また会えてホントに嬉しいわ。ホントに、ホントに。

コンスタンス あなた、とっても元気そう。ねえ、これが例の真珠のネックレス？

マリー・ルイーズ 素敵でしょ？ でも、モーティーはインドでもっと凄い宝石を買ってくれたのよ、

エメラルド。ジョン、こんにちは。お元気だった？

ジョン お蔭様で、どうにか。

マリー・ルイーズ ちよつと太ったんじゃない？

ジョン そんなことないと思うけど。

マリー・ルイーズ あたしは痩せたのよ。(コンスタンスに) 出発前に会えて良かった。会えなかったら寂しかったわ。(ジョンに) 旅行先はどこ？

ジョン ぼくは行かないんだ。コンスタンス一人だけ。

マリー・ルイーズ あら、そう。仕事を抜けられないってわけね。でも、いいんじゃない？ お金が儲かってしょうがないってことでしょうか？

ジョン まあね。ちよつと失礼するけど、ごめん。行かなくちやならない所があるんだ。

マリー・ルイーズ どうぞ、どうぞ。相変わらず忙しいのね。

ジョン じゃあ。

マリー・ルイーズ コンスタンスが留守してる間に、またお目にかかれるわよね？

ジョン もちろん、喜んで。

マリー・ルイーズ モーティー、ゴルフの腕が上がったのよ。あなたとプレーしたいって。

ジョン そう。是非お手合せ願いたいと伝えといて。

ジョンは出て行く。

マリイ・ルイーズ よかった。実は二人だけで話したかったの。席を外してくれるなんて、ジョンも分かってるじゃない。話したいこと山ほどあるわ。まずは、何もかも順調ってこと。あなたの言ったとおりよ。一年ほど外国旅行に行こうって提案してみたらって言ったけど、正解だった。

コンスタンス モーティマーは馬鹿じゃないから。

マリイ・ルイーズ そうよ。実際、男としては、かなり賢い方よ。分かるでしょ？——あんなことがあったのに、最後には、あたしの言うこと受け入れてくれたんだから。でも、完全に納得してるわけじゃないのは判ってた。ねえ、男って、一度思いこむと、なかなか忘れられないみたいね。でも、このアジア旅行は素晴らしい思いつきだった。あたし、旅行の間ずっと、あの人の天使になってあげたの。あの人はあの人で、旅行を楽しみながら、商売の方も抜け目なくやって、結構お金も稼いだ。だから、すべてトントン拍子。

コンスタンス よかったじゃない。

マリイ・ルイーズ みんなあなたのお蔭。あたし、モーティーにセイロンでサファイアを買わせたの、あなたのために。あなたを侮辱したんだから、何か償いをしなくちゃいけないって。最高のサファイア。百二十ポンドもしたのよ。これからカルティエへ持っていくつもり。ペンダントになるか、何になるか、後のお楽しみ。

コンスタンス それはそれは。ドキドキしちゃう。

マリイ・ルイーズ あたしが感謝の気持ちを知らない人間だなんて考えないでしょ？ ところで、ねえ、

コンスタンス、ホントはこれを最初に言いたかったんだけど、……あなた、あたしとジョンのことでもう悩むことないわ。

コンスタンス 悩んだことなんて、これまでもなくってよ。

マリイ・ルイーズ あたし、ひどいことした。でも、あなたに判っちゃうなんて考えもしなかった。

もし考えてたら、あんなこと絶対しなかった。それは分かってくれるでしょ？

コンスタンス あなた優しいものね。

マリイ・ルイーズ ねえ、そこで一つお願いがあるんだけど……。

コンスタンス 友達ですもの、何でも喜んで。

マリイ・ルイーズ あなた、ジョンがどんな人か判ってるわよね。ホントに好きな人。優しいし、親切だし。でも、今すぐ知るべきだと思うの、——終わったことは終わったことにするべきだった。

コンスタンス 終わった？

マリイ・ルイーズ もちろんジョンが今でもあたしに首っ丈なのは分かっている。この部屋に入った途端分かったわ。でも、それは非難できない。でしょ？

コンスタンス 男性にとつてあなたほど魅力的な女性はいないものね。

マリイ・ルイーズ でも、自分のことを優先して考えなくちゃならない時もある。あなたが何もかも知ってるって判った以上、前の関係が続けることはできないわ。ジョンにもそのことを理解してほしいのよ。

コンスタンス わたしはできるだけ知らない風をしたわ。

マリー・ルイーズ そうね。でも、いま思うと、何だかあたしたち虚仮こけにされてたみたい。ロマンスの香りが全然なくなっちゃった。言いたいこと解る？

コンスタンス 何となく。

マリー・ルイーズ ねえ、ジョンの気持を傷つけたくはないんだけど、…遠回しに言ってもしょうがないでしょう、あたし、ジョンとは完全にお終しまいにしてようって決めたの。あなたが旅行に出掛ける前に、そのことをはっきりさせたいの。

コンスタンス そりゃ、また、突然ね。ジョンには大変なショックでしょうよ。

マリー・ルイーズ あたし、固く決心したの。

コンスタンス 分かった。涙をそそる別れの場面を情感たつぷり演じてる時間はないと思うけど、とにかく、ジョンはまだ家にいるはずだから呼んでくる。あなた、十分あれば充分？

マリー・ルイーズ でも、あたしからは言えない。あなたから話してほしいの。

コンスタンス わたしが？

マリー・ルイーズ あなたはジョンをよく知ってるし、どう話したらいいかも分かると思うの。自分に夢中になってる男ひとに、自分の口から、もう愛してはいないって言うのは難しいわ。第三者の方が言い易いと思うの。

コンスタンス 本当にそう思う？

マリー・ルイーズ 絶対そう。ねえ、これからはただの良いお友達でいたい、そう言ってたって伝えて。あなたのことを考えて決めたって。だってあなたはこれまでずっと、あたしたちにとっても

よくしてくれましたもの。あたし、フェアに行きたいの。ジョンに伝えて——これからもずっと優しい気持で見守っています、本当に愛したのはあなただけでした、でもお別れするのが一番だと思えますって。

コンスタンス でもジョンが別れたくないって言ったら？

マリー・ルイーズ そんなこと言わないでって言って。そんなこと言われたら、もう会えなくなっちゃう、目を真っ赤に泣きはらしていなくちゃならなくなるって。ねえ、お願い、コンスタンス、やってくれるわよね？

コンスタンス 分かった。

マリー・ルイーズ ねえ、イギリスへ戻る途中、パリで繻子織サテンのワンピースを買ったの。淡い緑の素敵なワンピース。あなたに似合うと思うわ。貰ってくれない？ まだ一度しか袖を通してないのよ。

コンスタンス マリー・ルイーズ、もう喋っちゃってもいいでしょう？——今すぐジョンをお払い箱にしたい本当の理由はな—に？

マリー・ルイーズはコンスタンスを見て、悪戯いたづらっぽい笑みを浮かべる。

マリー・ルイーズ 誰にも言わないって誓う？

コンスタンス 名誉にかけて。

マリー・ルイーズ 実は、インドでとってもハンサムな青年に出会ったの。ある行政区の副長官。その人と帰りの船が一緒で……。彼、あたしに夢中なの。

コンスタンス で、あなたも彼に夢中ってわけね。

マリー・ルイーズ もうめろめろ。この先どうなるか想像もつかない。

コンスタンス あら、あなた充分想像ついてるはずよ。わたしもだけど。

マリー・ルイーズ あたしみたいに熱い心を持って生まれると、いろいろ大変なのよ。あなたには解らないでしょうね。いつも冷静だから。

コンスタンス (穏やかに) マリー・ルイーズ、あなたは可愛い娼婦。

マリー・ルイーズ あら、ひどい。あたし娼婦なんかじゃないわ。恋はいっぱいするけど、誰でもいいってわけじゃないもの。

コンスタンス あなたが正直者の娼婦なら、わたし、もつと尊敬するんだけど……。娼婦が男と付き合うのは、少なくとも、生活の糧を稼ぐため。あなたは必要なものはもちろん、欲しいもの全てを旦那さんから貰^{もら}っておいて、それに見合ったお返しをしてない。その意味じゃ、最低の詐欺師。マリー・ルイーズ (驚き、真に傷ついて) コンスタンス、どうしてそんなこと言うの？ 酷^{ひど}すぎる。あたしのこと好きだと思っただけなのに。

コンスタンス 好きよ。大嘘吐きで、ペテン師で、寄生虫にはちがいないけど、でも、あなたが大好き。

マリー・ルイーズ そんな風に思ってたなら、好きになれないはずよ。

コンスタンス そんなことないわ、大好きよ。あなたは陽気だし、気前がよくって、時々だけど面白いこと言うもの。大好きを通り越して、愛してるって言ってもいいくらい。

マリー・ルイーズ (微笑んで) あなた、口から出^で任せ言^{まか}ってるんでしょう。あたし、いつも、心からあなたのお友達でいようと思ってるのに。

コンスタンス わたし、あるがままに人を見るよう心掛けているの。二十年後には、あなたきつと、礼節の鑑^{かたみ}になってるわ。

マリー・ルイーズ コンスタンス、あなたが本気じゃないことは分かった。冗談がそんなに好きなら、これからお好きだけどうぞ。

コンスタンス じゃあ、もう帰って。わたし、ジョンにあなたの気持を伝えなくちゃ。マリー・ルイーズ じゃあね、さよなら。くれぐれも優しく伝えてね。ジョンを苦しめなくちゃならない理由はないんだから。(彼女はドアに向かう。が、ドアの所で立ち止まる。) あなたみたいな美人が、どうして男の人にもてないのか不思議だったんだけど、やっと解った。

コンスタンス そう？ 何故？ ぜひ教えて。
マリー・ルイーズ あなたはね、……ユーモアがありすぎるのよ。男って、ユーモアのある女は避けたいの。

マリー・ルイーズは出てゆく。すぐにドアが慎重に開かれ、ジョンが顔を覗かせる。

ジョン 帰った？

コンスタンス 入って。＃すがすがしき夕べ、すべては円く収まった。＃（注8）

ジョン ドアが閉まる音がしたけど。…話してくれた？

コンスタンス ええ、伝えた。

ジョン 動揺してた？

コンスタンス もちろん、ショックだったようよ。でも、なんとか堪えてた。

ジョン 泣いた？

コンスタンス いいえ、泣きはしなかった。あまりの打撃に茫然自失といったところかしら。でも、家に帰って、失ったものの大きさが解ったら、きつとひどく泣くでしょうね。

ジョン 女性が泣くところを見るのは嫌いなんだ。

コンスタンス そりゃあ辛いわよ。でも、泣けば神経が安まるわ。

ジョン きみは冷静だな。ぼくはどうも落ち着かない。ひどい仕打ちを受けたって思われたくないんだ。

コンスタンス あなたがこうするのはわたしのためだって、あの人、充分解ってる。それに、今でもあの人をとつても大切に思ってることも。

ジョン でも、これっきりだってこともちゃんと解らせてくれたらどうね？

コンスタンス ええ、はつきりと。

ジョン 本当に感謝してる。

コンスタンス どういたしました。

ジョン これで、きみも後顧の憂いなく旅立つことができるわけだ。よかった。ところで、先立つ物が必要なんじゃない？ 小切手ならすぐ切るよ。

コンスタンス ありがとう。でも結構よ。お金はたっぷりあるから。この一年働いて、千四百ポンド稼いだの。

ジョン ほんと！ 凄いいじゃないか。

コンスタンス そのうちの二百ポンドをこの旅行のために使うの。それから、洋服やら何やら買うのに二百ポンド使った。で、残りの千ポンドは今朝あなたの口座に振り込んでおいた。この一年分の家賃と食事代。

ジョン そんな！ 家賃だ食事代だなんて、馬鹿げてる。そんなもの、欲しくない。

コンスタンス どうしても払いたいの。

ジョン もうぼくを愛していないってこと？

コンスタンス それとこれとどんな関係があるの？ 女は男に養われてる時だけ男を愛することができると言うわけ？ ジョン、あなた、自分の魅力を過小評価してるんじゃない？ あなたは優しくってハンサムで、とつても素敵よ。

ジョン 馬鹿なこと言わないでくれ、コンスタンス。ぼくはきみが見苦しくなく暮らしていけるだけの金は稼いでるつもりだ。家賃だ食事代だなんて、侮辱だよ。

コンスタンス でも、たとえ侮辱だとしても、気持よく飲み込める侮辱だと思わない？ 千ポンドあ

れば楽しいことがいっぱいできるわ。

ジョン 受け取る気はない。だいたい、働くってことには最初から反対だったんだ。家のことやら何やら、することはいろいろあるんだから。

コンスタンス あなた、わたしが働きはじめてから居心地が悪かったと？

ジョン そんなことはないけど……。

コンスタンス ねえ、無能な女は、家事は大変だとか何だとか、つまらないこと言い立てるけど、要領が解つてて、良い召使が何人かいれば、主婦の仕事なんて一日十分で足りるのよ。本当よ。

ジョン まあ、きみが働きたいって言って、それを了承したんだから。それに、実際、きみに向いてる仕事だし、気に入るだろうとは思ってた。でも、まさか、そこからお金を貰おうとは！

コンスタンス 予想しなかったでしょうね。

ジョン コンスタンス、ずっと考えてたんだけど、働こうって思ったのはマリー・ルイーザのことと関係あるのかい？

暫し間がある。次にコンスタンスが話し出した時、その口調は幾分か真面目になっている。

コンスタンス あなた、何故わたしがあのことを知ってもあなたを非難しなかったか、考えたことがある？

ジョン うん。ただ、きみは途轍もなく善い人だから……。

コンスタンス ちがうわ。わたしにはあなたを非難する資格はないって思ったの。

ジョン 何をおっしゃる。資格なら充分すぎるほどあったさ。ぼくらがやったことはとんでもないことだ。獣にも劣る。でも有難いことに、今は深く反省してる。

コンスタンス あなたは、わたしに女としての魅力を感じなくなっていた。それをどうして非難できて？ でも、女として必要とされないなら、わたしはあなたにとつて何の役に立つというのかしら？ あなたにだつて分かるでしょ？——この家を整理整頓して気持ちいい状態にしておくためにわたしがやっていることといたら、本当にこれっぽっちしかないわ。

ジョン でも、きみはヘレンの母親だ。

コンスタンス それはあんまり強調しない方が良くないじゃない？ わたしは、健康な女としての自然な役割を務めた。でも、生まれた後は、子供の世話をするっていう退屈な仕事は、わたしなんかよりよっぽど知識も経験も豊富な人たちに任せっきり。ねえ、よく考えてみて。わたしは、居候に過ぎないのよ。寄生虫。あなたは結婚することで法律上の義務を負った。だから、わたしを路頭に迷わすことはできない。わたし、とても感謝しています。でも、感謝しながら負い目を感じているの。だつてあなたは、一度だつて口に出したり、態度で示したりしたことがないんですもの、——あたしが金喰い虫の、厄介な飾り物に過ぎないってことを。

ジョン 厄介な飾り物だなんて、考えたこともないな。それに、居候だ、寄生虫だつて、それってどういうこと？ きみが使うお金をペニーだつて出し惜しんだことがあるかい？ そんな風に見えることある？

コンスタンス (呆れた顔を装って) あなた、本気? 本当はあなたがお目出度いからやっつてるに過ぎないことを、優しくして礼儀正しい人だからしてくれてるんだって、わたしがそう考えている、——あなた本気でそう言うの? あなたも他のお馬鹿な男と同じように、女の言うくだらない虚仮威しを信じてるの? 結婚した以上、夫は妻に、食べ物から贅沢品に到るまで何もかも提供すべきだって、そう思うの?——自分の楽しみや満足、自分の都合を犠牲にしてまで。奴隷か農奴みたいに扱われても、雇ってもらっている以上、妻に感謝しなくちゃいけないってわけ? ねえ、ジョン、すっかりしてよ。そんなの百年遅れてる。ハーレムという壁を打ち破った以上、女だって男と同じように社会の厳しい現実を受け入れるべきなのよ。

ジョン でも、きみはいろんなことを忘れてる。まず第一に、男はたとえそれが過去のものになったとしても、女性が与えてくれた愛に感謝するものなんだ、そう思わない?

コンスタンス 確かに感謝の気持は男の方が強いようね、ただし、取り立てて犠牲を払う必要がない限り、のようだけど。

ジョン そりゃ、また、変な見方だな。でも、ぼくが感謝するのは当然だろう? なんだってきみは、マリー・ルイズとのことをずっと前から知ってたのに黙っててくれたんだから。それで、一体何故あの件がきっかけで仕事をしようって気になったのか、そこんところが知りたいんだけど。

コンスタンス わたしは本来怠け者なの。世間体さえ保てるなら、自然に手に入るものはそのまま頂戴して、お返ししないで済むんならしないで済ませたい、そう考える人間——要は寄生虫。でも、自分が寄生虫だってことはちゃんと分かっていた。だけど状況があんな風になった時、つまり、わ

たしが只の寄生虫だって事実をあなたが面と向かって言わないでいてくれるのは、単にあなたが優しいか、それとも知性が欠如しているかのどっちかだって状況になった時、わたし、それまでの生き方を変えようと思ったの。もしそうしたいと思ったら、礼儀正しく穏やかに、でも断固として、"なめたらいかんぜよ" って言える、そんな立場に立ちたいって。

ジョン で、今はその立場に立ってわけて?

コンスタンス ええ、そうよ。わたし、今はあなたに何の負い目もない。自分の面倒は自分で見られる。この一年分の生活費は返したわ。自由というのは大切なものだけど、なかでも一番大切なのは経済的自由。バグパイプを吹く人に何を演奏してほしいか注文できるのは、結局、お金を払う人でしょ? これまではあなたが、——あなた方男性がお金を払ってきた。でも、今はわたしも好きな曲を注文できる。その自由を手に入れたの。こんな楽しい気分になったのは、初めて、アリスを食べたとき以来。

ジョン ねえ、ぼくとしては、きみが、他の女性みたいに一月くらい不機嫌で、喧嘩を売って困らせてくれた方がまだよかったね。そんなふうには、冷たい、何だか怨念みたいなものを持たれるよりは。

コンスタンス あなた、何言ってるの。かわいそうに、どうしちゃったの。あなたはわたしのこと十五年も見てきたのよ。怨念だなんて、わたしが他の女みたいに、そんな在り来りの、恩知らずな感情を持つって? ねえ、あなた、わたしは今でもあなたが大好きよ。

ジョン じゃあ、きみは、仕事に就いた時も、ぼくの口座に千ポンド振り込んだ時も、ぼくを馬鹿に

してやろうなんて気は全然なかったって言うのかい？

コンスタンス ええ、名譽にかけて誓います。今ここでこの心を取り出してお見せできれば、あなたに対する愛情と、思い遣りの気持ちしかないってことが判ってもらえるんですけど。信じてもらえない？

ジョンは暫しコンスタンスを見つめ、困惑したような様子を見せる。

ジョン とつてもヘンな気持だけど、信じるね。コンスタンス、きみは女として珍しい人だ。

コンスタンス ええ、そうよ。でも、それは人には言わないでおいてね。一度評判が落ちると、なかなか元に戻らないから。

ジョン (優しく微笑みながら) 一緒に行けたらよかったのに。きみ一人で旅行するってのは、どうも気に入らないな。

コンスタンス あら、一人じゃないわ。言わなかったかしら。

ジョン 聞いてないな。

コンスタンス 言ったつもりなんだけど。わたし、バーナードと行くのよ。

ジョン あっ、そう。で、他には誰が？

コンスタンス 誰も。

ジョン えっ！(彼は相当に驚く。)でも、それって変に思われない？

コンスタンス どうして？

ジョン (コンスタンスの言葉をどう受け取ったらいいのか解らなくて) ええと、だって、普通じゃないだろう？——若い女性が男と一緒に六週間も休暇を過ごすなんて、しかも、バーナードはきみのお父さんと呼べるような年齢じゃないんだよ。

コンスタンス そう、あなたとだいたい同い年。

ジョン ゴシップの種になるとは思わないのかい？

コンスタンス わざわざみんなに知らせるなんてことはしないわ。そうだ、まだ誰にも言っていなかったんだ。あなたが最初。でもあなたは分別があるから、誰かに話すなんてことはしないわよね。

ジョンは突然カラーがきつすぎることに気づいたかのように、カラーを緩めようとする。

ジョン でも絶対、誰か知合いに見られるよ。で、その連中から噂が伝わる。

コンスタンス あら、わたしはそうは思わない。ずっと自動車で移動するし、みんなが行きたがるよ。うな所には興味ないもの。わたしたちが付き合ってる人たちの有難いところは、みんな、有名な観光地に泊まってくれること。しかも、知合いがみんな集まる時期にね。

ジョン もちろん、ぼくも馬鹿じゃないから、男と女と一緒に旅行したからって必ずしも最悪の事態を想像しなくちゃならないわけじゃない、ってことは分かっているけど、でも、やっぱり普通じゃないよ。ぼくだから、きみたちの間には何も無いって信じるけど、普通の連中は絶対そうは考え

ない。

コンスタンス (極めて冷静に) わたし、いつも思うんだけど、自分は賢いと思ってる人って、自分には判断力があるって考えたがるよね。でも実際は、普通の人の方がよっぽど常識も判断力もあるんじゃないかしら。

ジョン (ゆっくりと) 言ってることがよく分からない。

コンスタンス そう？ 分からない？ バーナードとわたしは、当然、夫と妻として旅行するのよ。

ジョン 馬鹿な。きみは自分が何を言ってるのか解ってない。これは冗談事じゃないんだ。

コンスタンス でも、ねえ、ジョン、わたしたちが他の何に見えるって言うの？ わたしってそんなに——言ってることが信じてもらえないほど——魅力ないかしら。夫婦として以外に、バーナードと行く意味があって？ もし、単に旅の道連れが欲しいんなら、女の人と一緒に行く。その方がいいろと楽じゃない？ わたしが頭が痛いって言えば、わたしも頭痛がするわって付き合ってくれるし、一緒に美容院にも行けるし、素敵な寝間着を持ってたら真似して作ることだってできる。旅の道連れなら、男性より女性の方が絶対好いわ。

ジョン ぼくが馬鹿なのかもしれないけど、どうしてもよく解らないんだ。きみは、バーナード・カーサルはきみの恋人だ、そう理解しろって言うのかい？

コンスタンス 全然。

ジョン じゃあ、一体全体、どういうこと？

コンスタンス ねえ、あなた、これ以上はつきりさせようがないと思うんだけど。わたしは六週間のバカンスに出掛けることにした。するとバーナードが、ではお供しましょうかと申し出てくれた、それだけのこと。

ジョン で、ぼくは？ ぼくの出る幕は？

コンスタンス 無し。あなたは家において、患者さんのお世話。

ジョン (何とか自分を抑えようとしながら) ぼくは、自分は分別のある男だと思ってるから、カッとしたりはしないつもりだ。大抵の男ならこんな時、床を踏みなしたり、わめき散らしたり、家具を壊したりするんだろが、そんなメロドラマみたいなことをするつもりはない。でも、これだけは言わせてくれ、——きみの言うことにはおつたまげた。

コンスタンス でしょうね、でも、それも暫くの間よ。そのうち慣れて、まあそんなものかなって諦めがつくわ。

ジョン 諦める？ 慣れる？ そんなこと絶対ない。ああ、くそ、今にも脳卒中が起りそうだ。

コンスタンス じゃあ、もっとカラーを緩めたら？ あなたの顔、真っ赤よ。

ジョン あいつと一緒に行くことを許すと思うのか？

コンスタンス (機嫌良く) だって、邪魔することはできないでしょう？

ジョン 本気だとはとても信じられない。どうしてそんなことを思いついたんだ。

コンスタンス (軽やかに) 気分転換をした方がいいかなって。

ジョン 馬鹿な。

コンスタンス どうして？ あなたはしたわ。憶えてるでしょ？ あなたはわたしとの生活に飽きて、

精気を失いはじめてた。その時マリー・ルイズとのことが始まった。あれで、あなたは本当に変わった。陽気で、活気に溢れた、一緒にいて楽しい人になった。道徳的に見て、マリー・ルイズとの関係が良い影響を与えたことは確かだわ。

ジョン 男と女では違うんだ。

コンスタンス あなた、もしかしたらって考えてるの？ もうヴィクトリア女王様の時代じゃないのよ。小説のなかに星印とか空白があつて、暫くすると赤ちゃんが生まれてる——そんな時代はもう終わったの。

ジョン そうじゃない。そんなことは考えてない。ぼくの言いたいのは、夫が浮気をしたら妻は同情の対象になるけど、妻に浮気された男は笑ひ者にされるってことだ。

コンスタンス それは陳腐な偏見。道理の解つた人なら、そんなもの無視するように努めなくちゃ。

ジョン じゃあ、おとなしく座ってる、あいつがぼくの目の前から妻を掻っ攫つてくの、指を啣えて見てろって言うのか。ひよつとしたら、あいつと握手して、妻をよろしくって言わせようっていうんじゃないだろうな。

コンスタンス よく分かつてるじゃない。まさにそうお願いしようと思つてたの。あの人、あなたにお別れを言うために、もうすぐここに来るわ。

ジョン 叩きのめしてやる。

コンスタンス わたしだったら、止めておくわね。あの人、とっても頑丈だし、それに、あの左のパンチは相当凄そうよ。

ジョン 思つてることを何から何まで言つてやる。

コンスタンス 何故？ 忘れたの？——わたしはマリー・ルイズにそんなことしなかつたわ。わたしたちは飽くまでも大の親友だつた。マリー・ルイズも帽子を買いに行く時は、必ずわたしに、選ぶのを手伝つて言つた。

ジョン ぼくの躰の中には赤い血が流れてるんだ。

コンスタンス いま問題なのは、赤い血じゃなくて、灰色の脳味噌だと思ふけど？

ジョン あいつはきみを愛しているのか？

コンスタンス 猛烈に。あなた、気がつかかなかつた？

ジョン ぼくが？ どうしてそんなこと。

コンスタンス あの人、この一年よくここに来てたでしょ？ あなたに会いに来てたと思つて？

ジョン あいつには全然關心なかつた。退屈な奴だと思つてただけだ。

コンスタンス 退屈な人よ。でも、とっても優しいわ。

ジョン 一体全体、友達面して他人の家で飲み食いしながら、陰で女房に言い寄ろうなんて、あいつはどんな奴なんだ。

コンスタンス あなたのような人よ。違う？

ジョン 違うさ。モーターは女房を寝取られて当然の間抜けだつたんだ。

コンスタンス でも、神様がどんな意図をお持ちかは、誰にも判らないんじゃない？

ジョン きみは、何としてもぼくを絶望に追い込みたいみたいだな。くそ、何か打つ壊したくなって

きた。
コンスタンス そこにヘンリー伯父さんが結婚のお祝いにつて呉れた鉢があるわ。その、緑と白のやつ。それなら壊して結構よ。どうせ偽物だから。

ジョンは鉢を取り上げるとそれを床に叩きつける。鉢は粉々になる。

ジョン うーん。

コンスタンス 清々した？

ジョン 全然。

コンスタンス じゃア、もったいなかった。病院のお仲間の結婚祝いに使えたかもしれないもの。

ベントリーがカルヴァー夫人の来訪を告げる。

ベントリー カルヴァー夫人です。(退場。)

コンスタンス 母さん、来てくれたのね。ありがとう。出発する前にぜひ会いたかったの。

カルヴァー夫人 (壊れた鉢をみて) 落っこしたの？

コンスタンス ううん。ジョンが、むじやくしやすから何か壊したら気が晴れるんじゃないかって。

カルヴァー夫人 この人はむじやくしやすするような人じゃありませんよ。

ジョン それはお義母さんの考えで、ぼくはむじやくしやすする時はむじやくしやすするんです。今は無

茶苦茶むぢやくしやしてます。お義母さんもこの件に一枚噛んでるんですか？

コンスタンス 母さんは何も知らないわ。

ジョン じゃあ、なんとか止めてください。お義母さんは自分の娘に少しは影響力を持つてるはずですよ。これがとんでもないことだってことは分かるはずですよ。

カルヴァー夫人 ねえ、ジョン、何言ってるのか、さっぱり分からないんだけど。

ジョン コンスタンスはイタリアへ、バーナード・カーサルと行くんです。二人つきりです。

カルヴァー夫人 (目を丸くして) そんなの有り得ない。どうしてそうだと判るの。

ジョン コンスタンスがそう言ったんです。突然、凶々しく。話の途中で、まるで「あなた、その外套、ブラシを掛けた方が良いわよ」ってな調子で。

カルヴァー夫人 本当なのかい？

コンスタンス ええ、そうよ。

カルヴァー夫人 でも、おまえ、ジョンとはうまくいったんじゃないのかい？ これ以上の鴛鴦夫婦はないと思っただけがね。

ジョン ぼくもです。これまで喧嘩のケの字もなかった。とつてもうまくいった。

カルヴァー夫人 コンスタンス、おまえ、もうジョンを愛してないの？

コンスタンス いいえ、大好きよ。

ジョン よく言うよ！ これ以上ない屈辱を与えようっていうのに。

コンスタンス あなた、よく考えてみて。今わたしがしようとしてることは、一年前あなたがしたことと同じよ。

ジョン (希望の光を見たと勘違いして、コンスタンスに大股で近づきながら) そうか、マリー・ルイーゼとのことで、ぼくを懲らしめてやろう、借りを返してやろうってことか。

コンスタンス 莫迦なことじゃないわ。そんなこと考えてないわ。

カルヴァー夫人 コンスタンス、今はあの時とは状況が違う。おまえを騙すなんて、確かにジョンはいけない子でしたよ。ひどいことをして、みんなの心を傷つけた。でも、今は後悔してるし、充分お仕置きを受けたじゃないですか。男は男、ああいうことは予想できたことなんです。男なんだから勘弁してやらなくっちゃ。でも、女は違う。女はそういうことをしちやいけない。男は生まれつき気が多いんです。だから、分別ある女なら、夫がたまに道を踏み外したからって、目くじら立てたりしない。現代文明が押しつけてる道徳は、男にとっちゃ、ちよっと荷が重いものなんです。それに対して女は、生まれつき一人の男に尽くすように出来てるんです。だから、女はその道から足を踏み外すと、世間が黙っちゃいけないんです。

コンスタンス (微笑んで) 雄の家鴨の餌は、雌の家鴨の餌にはならないってこと？ 自然界の法則って難しいのね。

カルヴァー夫人 男は少しぐらい浮気したって、道徳的に墮落するわけじゃない。いろんな女と戯れてても、至極真つ当で、働き者で、頼りになる男は幾らでもいるでしょう。でも、女は違う。浮気すると女は駄目になる。嘘を吐くようになって、金遣いが荒くなって、だらしなくなつて、や

るべきことをやらなくなる。だから何千年も前からずっと、女には貞節が大事だって言われてきたんです。貞節こそが色んな道徳の要なんだって、みんな分かってたからですよ。

コンスタンス わたしの考えじゃ、女こそこれまで正直じゃなかった。何故かという、男に貞節を売りつけてきたから。食べる物と、住む所と、身の安全のために。本来売りつけるようなものじゃないのに。女は男の財産だった。妻は夫に完全に頼っていた。だから、不貞を働くということは、嘘を吐くことだし、泥棒行為だったわけ。でも、わたしは今ジョンに何も頼っていない。経済的に独立した。だから、性的にも独立した。今日の午後、ジョンの口座に千ポンド振り込んできたわ。この一年分の食事代、家賃をね。

ジョン ぼくは受け取らない。

コンスタンス 駄目よ、受け取らなくちゃ駄目。

カルヴァー夫人 コンスタンス、怒つても何にもなりませんよ。

コンスタンス あら、わたしはとつても冷静よ。

ジョン きみが自由恋愛とかいうものを面白いと思つてるとしたら、とんでもない間違いだ。近頃その自由恋愛とかいう発明が過大評価されすぎてるんだ。

コンスタンス なら、何故みんな夢中になるのかしら。

ジョン ええい、くそ！ ぼくは自分が何を喋ってるのか分かつてるつもりだ。いいかい、自由恋愛なんてものは、結婚生活の厭な面ばかりあって、好いことは一つもないんだよ。結局は割に合わないものさ。

コンスタンス かもしれない。でも、他人の経験から学ぶのって難しいのよね。わたしはわたしで経験してみたいの。

カルヴァー夫人 おまえバーナードに恋してるの？

コンスタンス 正直言って、自分でも決めかねてる。自分が恋してるのかどうか、どうしたら判るのかしら。

カルヴァー夫人 あたしの知ってる判定法は一つだけ。おまえ、バーナードの使った歯ブラシを使える？

コンスタンス とんでもない。

カルヴァー夫人 じゃあ、恋してるとは言えないね。

コンスタンス あの人、十五年もわたしのこと思い続けてくれたのよ。そんなに長いあいだ愛してきてくれたなんて、心がくすぐられない？ わたし、その愛に感謝していかないわけじゃないってことを、何かかたちで示してあげたいの。ねえ、あの人、六週間後には日本に帰るのよ。今わたしは三十六。あの方はわたしに夢中。でも今度イギリスに来られるのは七年後。七年経ったらわたしは四十三。四十三でも魅力的な女性がいることはいるけど、でも、五十五の男が夢中になる年齢じゃないわ。わたし、今しかないって結論に達した。この機会を逃したら、もう二度とチャンスは巡ってこない。だから、最後の六週間に一緒にイタリアで過ごす気はないかって訊いたの。船がナポリの港を離れる時、わたしの振るハンカチを見ながら、これまでの無私の愛情は決して無駄じゃなかった、十分に報われたって感じてくれたらなって思ったの。

ジョン 六週間。きみ、六週間経ったらあの男と別れるつもりなのかい？

コンスタンス もちろん、そうよ。六週間って期限を設けることで、美しくも儂いこの恋は完璧なものになる。ねえ、あなた、薔薇が美しいのは、満開になるとすぐに落ちるから、——そう思わない？

ジョン あんまりにもショックで吃驚してるから、何て答えたらいいのか分からないな。今のぼくは、その質問の回答者として最悪だ。

窓の所に立っていたカルヴァー夫人が、小さく声を上げる。

コンスタンス どうかした？

カルヴァー夫人 バーナードよ。いま玄関先に車が停まった。

ジョン コンスタンス、きみらが何を計画してるのか全く知らないみたいなの、お目出度い顔であの男を迎えた方が良いのかい？

コンスタンス その方が楽なんじゃない？ 騒ぎ立てたってみつともないだけだし、それで出発を止められるわけじゃないもの。

ジョン ぼくにも男としての誇りつてもがあるんだ。

コンスタンス それはポケットに大切に仕舞っておいて。マリー・ルイズがあなたのいい人だって判った時わたしがあの人に対して振舞ったのと同じように、バーナードに接してくれたら嬉しい

わ。

ジョン あいつはぼくが知ってるって知ってるんだらうか。

コンスタンス もちろん知らないわよ。ねえ、分かるでしょ？——あの人、かなり古風な人だから、もしあなたが知ってるって知ってたら、知らない顔し続けるなんてできっこない。あなたのこと、友達だと思ってるんですもの。

カルヴァー夫人 ねえ、おまえ、もう一度訊くけど、考え直すことはできないの？

コンスタンス 無理ね。

カルヴァー夫人 じゃあ、あたしも酸素の無駄遣いはしないでおく。あの人が入ってくる前に退散することになります。

コンスタンス 分かった。じゃあ、母さん、しばらくお別れね。絵葉書をたくさん書くわ。

カルヴァー夫人 コンスタンス、あたしはおまえのやろうとしていることを良しとしているわけじゃありませんよ。それに、そんな風をするつもりもありません。いい、もう一度言っておくけど、そんなことしたって何にも良いことはないんですよ。男っていうのは生まれながらに不道徳で、だけど陽気で単純で、要は妻を騙すように出来てるんです。それに対して女は、貞節で、くどくど歎きながらも夫を赦すように出来てる。それが大昔からの定めなんです。おまえのその新奇で珍奇な考えだって、結局のところ、神様のお創りになった定めをひっくり返すことはできないんです。

ベントリーが入ってくる。続いてバーナード・カーサル。

ベントリー カーサル様です。

カルヴァー夫人 こんにちは、バーナード。そして、ごきげんよう、さようなら。あたし、ちょうど帰るところだったの。

バーナード それは残念です。ごきげんよう。

カルヴァー夫人は出てゆく。

コンスタンス (バーナードに) こんにちは。ちょっと失礼。(ベントリーに) ベントリー、荷物を

下に運んでおいて、タクシーにすぐ積めるように。

ベントリー かしこまりました。

バーナード 出発なさるところだったんですか？ よかった。あなたにお会いできなかったら、一生後悔したでしょうから。

コンスタンス それで、タクシーが来たらずぐ知らせて。

ベントリー かしこまりました、奥様。

コンスタンス さて、これでよしと。あらためまして、こんにちは。

ベントリー退場。

バーナード 休暇を楽しみにしていらつしやるんですね？

コンスタンス とつても。今度のような旅は生まれて初めてなの。本当にワクワク。

バーナード お一人で？

コンスタンス ええ。まったくの一人旅。

バーナード ジョン、一緒に行けなくて口惜しいんじゃないかね？

ジョン 口惜しいね。

バーナード まあ、大きな責任を担っている者の宿命かな。患者を最優先に考えなくちゃならないってことはよく分かる。

ジョン よーくね。

コンスタンス ジョンはイタリアがあまり好きじゃないの。

バーナード イタリアにいらつしやるんですか。スペインとお聞きしたように記憶しますが。

ジョン ずっとイタリアって言ってるんだ。

バーナード そうか。じゃあ、きみの好みじゃないってわけだ。確か、コモ湖まで行けば、近くにゴルフ場があったと思うが。

ジョン そうかね。

バーナード コンスタンス、七月の終り頃ナポリの辺りを通りかかるといふことはないでしょうね？

コンスタンス さあ、どうかしら。何も計画らしい計画は立てていませんのよ。

バーナード 何故こんなことを申し上げるのかと言えば、実はその頃ナポリから日本に向かう船に乗るつもりでいますので、向こうでお会いできたら嬉しいなと思ひまして。

ジョン 大いに嬉しいだろうさ。

コンスタンス わたしの留守中、時間の許す限りジョンと会ってくださいると有難いんですけど。この人も一人じゃちよつと寂しいんじゃないかって。来週あたり一度、ジョンとお夕食を付き合つてやってくださいらない？

バーナード 本当に残念なのですが、わたしも出掛けなくてはならないのです。

コンスタンス あら。日本にお帰りになるまではロンドンにいらつしやるのかと思ひましたわ。

バーナード そのつもりだったのですが、知合いの医者が、自分の処に来て治療したらどうかと言うので。

ジョン 治療？ どんな？

バーナード なに、大したことはないんだが、一度躰からだをオーバーホールした方が好いだろうってね。

ジョン なるほど？ で、何ていう医者なんだ？

バーナード 聞いたことのない男だと思うよ。戦争中に知り合つたんだ。

ジョン そう。

バーナード まあ、そういうわけで、これでお別れです。ロンドンを離れるのはとても名残惜しいのですが――わけでも、次にいつヨーロッパに帰ってこられるか判らないのですから、なおのこと

ですが、医者がそう言うてくれる以上、忠告に従った方が良いだろうと思ひまして。こちらからその医者に相談したこともありすし。

ジョン　ましてや、診察代に三ギニーも取られたんじゃね。

コンスタンス　残念ですわ。留守中ジョンがわるさしないように見張っててもらおうと思つてたんですけど。

バーナード　それは保証できかねたでしょうが、まあ、芝居を観に行つたり、ゴルフをする程度でしたら、何回かは付き合えたかもしれませんが。

コンスタンス　そうしてくだされば有難かつたのに。ねえ、ジョン？

ジョン　まったく。

ベントリーが入ってくる。

ベントリー　タクシーが参りました。

コンスタンス　ありがとうございます。

ベントリー退場。

バーナード　では、これで失礼します。またお目に掛かれるかどうか判りませんので、いま申し上げ

ておきますが、ロンドンで過ごしたこの一年の間にお二人が示してくださつたご親切には本当に感謝しています。

コンスタンス　わたしたちもあなたにお会いできてよかつたわ。

バーナード　あなたもジョンも本当によくしてくださつた。イギリスでこんなに愉しい時を過ごせるとは思つてもいませんでした。

コンスタンス　お帰りになつてしまうのかと思うと、わたしたち二人とも、とつても寂しいわ。ジョンにとっては、手術で手が離せない時わたしの面倒を見てくれる人がいるつてことは安心だつたでしょうから。ねえ、あなた？

ジョン　うん。

コンスタンス　この人、あなたと一緒になら心配ないつて言つてましたのよ。ねえ、あなた？

ジョン　うん。

バーナード　お役に立てたのかと思うと嬉しいです。どうかわたしのことをお忘れにならないでください。

コンスタンス　忘れるだなんて、そんな。ねえ、あなた？

ジョン　うん。

バーナード　そして、できれば、お暇な折にはお手紙を書いてほしいのですが。わたしのような海外で暮らす者にとつて、どんなに慰めになることか。

コンスタンス　もちろん書きますわ。二人で書きます。ねえ、あなた？

ジョン うん。

コンスタンス ジョンの書く手紙って、それは素敵なのよ。饒舌で、笑わせてくれて。

バーナード そりゃ楽しみだ。ジョン、じゃあ、これで。元気で。

ジョン ありがとう、きみも。

バーナード さようなら、コンスタンス。あなたには申し上げたいことがあります、どこから始めてらよいか……

ジョン 急かすつもりはないんだが、タクシーのメーターは止まっててくれないんでね。

バーナード ジョン、きみは現実的な男だな。(コンスタンスに) もう何も申し上げますまい。では、

これで。神の祝福のあらんことを。

コンスタンス さようなら。

バーナード もし方が一ナポリにお出でになるようなら、お知らせください。わたしの倶楽部の方に

お知らせくだされば、連絡が取れるようになっていきます。

コンスタンス 分かりました。

バーナード さようなら。

バーナードは二人に向かって愛想良く頷いた後、出てゆく。コンスタンスはくすくす笑い始める。が、やがて、それは抑えられない笑いとなる。

ジョン よかったら、何がそんなに可笑しいのか教えてくれないか？ ぼくが、ただお地藏さんみた

いにここに突っ立って、笑われるままになってると思ったら、そりゃ、きみ、間違ってるよ。あの、ナポリで偶然会えるかもしれないとか何とか、あの戯言はいったい何なんだ。

コンスタンス あの人、あれでもあなたを煙に巻こうと一所懸命だったのよ。

ジョン あの涙垂れ小僧が！

コンスタンス そう思う？ わたしはなかなかやるじゃないって思った。こうしたことに關してほとんど実戦経験がないんだから、よくやった方じゃない？

ジョン あいつを理想の恋人に仕立てたいと思ってる以上、いまさら何を言っても無駄だとは思いますが、でも、正直言つて——何の偏見もなしに、客観的に見てだよ——あんな男の腕のなかにきみが身を投げるのかと思うと、かわいそうな気がするね。

コンスタンス まあ、妻が恋人を持つとする時、夫としてはその男に対して妻とは異なった見解を持ちたくなる、それは当然でしょうね。

ジョン まさか、きみだって、あいつの方がぼくよりハンサムだなんて言わないだろう。

コンスタンス もちろんよ。あなたはわたしにとつて男性美の理想よ。

ジョン 着てるものだってぼくの方がよっぽどまいだ。

コンスタンス もちろんよ。服装のセンスであなたに勝とうだなんて、あの人全然思っていないわ。だって、背広を作るのはいつとも同じ店。

ジョン それに、まさか、ぼくよりあいつの方が笑わせてくれるなんて言わないだろう？

コンスタンス もちろんよ。

ジョン ジャあ、一体全体何故あいつと旅行に行きたいんだ？

コンスタンス 聞きたい？ わたし、手遅れになる前にもう一度、女としてのわたしに夢中になってくれる人の腕に抱かれたいの、わたしの残した足跡でさえも宝物にしてくれるような……。わたしが部屋に入ったとたん頬を赧らめてくれるような人。わたしたち、二人で月を見るの。彼はわたしの手を強く握ってくれる。そして彼の腕が躊躇いがちにわたしの腰に廻される。わたし、あのゾクゾクって感覚をもう一度味わってみたいの。わたしは彼の肩に手をのせる、すると彼がわたしの髪にそつと接吻するの。

ジョン そんなこと医学的に不可能だよ。そんなことしたら、頸の筋が痙攣を起こして、どうしたらいいか分からなくなる。

コンスタンス わたしたち、手に手を取り合って田舎の径を歩くの。彼はわたしを、スタンジーとか、コニーとか、ぼくの可愛いひよこちゃんとか、いろんな名前で呼んでくれる。わたしたち、何時間何時間も、たわいないお喋りを続けるの。

ジョン なんてこった。

コンスタンス 何も言わなくても、細波のように気持が彼に伝わってゆく……。この十年、わたし、あなたと一緒にで合せだった。わたしたち最高に仲の良い友達だったと思う。でも、ほんの暫くでいいから、そうじゃないものが欲しいの、どうしても。あなた、それを与えてくれないなんて、そんな渋ちんじゃないわよね？ わたし、もう一度、女として愛されたいの。

ジョン でも、コンスタンス、ぼくはきみを愛しているよ。確かにぼくは非道いことをした。きみを蔑ろにした。だけど、まだ遅すぎるってことはない。ぼくが本当に愛したのはきみだけなんだ。ぼくは何もかも捨てる。だから、イタリアへはぼくと一緒に行ってくれないか。

コンスタンス あなたとじゃ、スリルがないわ。

ジョン 頼むよ。少しは情けをかけてくれてもいいんじゃない？ ぼくはマリー・ルイズを諦めたんだ。きみだってバーナードを諦められるはずだ。

コンスタンス でもマリー・ルイズを諦めたのは自分のためでしょ？ わたしのためじゃないわ。

ジョン そんなに冷たくしなくたっていいだろう。ぼくと行こうよ。きつと愉快な旅になると思うな。コンスタンス 申し訳ないけど、ジョン、わたしが汗水垂らして働いて、経済的独立を手に入れたのは、あなたと二番煎じのハネムーンをするためじゃないの。

ジョン ぼくだって、その気になれば、情熱的な恋人になれると思うんだけど。

コンスタンス 昨日の残りのお肉を使って、明日のためにカツレツを作ろうたって、そりや無理よ。ジョン きみは自分がしていることが分かってるんだろうな？ ぼくはこれからは理想的な夫になるうって決心してたんだ。でも、こんなことじゃ、もう一度マリー・ルイズの腕の中に戻っちゃうね。きみがこの家を出たとたん、まっしぐらに彼女の家に車を走らせる。

コンスタンス わたし、実りのないドライブはさせたくないから正直に言うけど、残念ながら、マリー・ルイズは家にいないと思うわ。若い恋人ができたのよ。もうめるめるだって。

ジョン ウソー！

コンスタンス インドのどこかの副長官だそうよ。それで、あなたとのことはもう終わったことにしたいから、そのことを伝えてほしいって。さつき来たのはそのため。

ジョン コンスタンス、きみ、その前にちゃんと伝えてくれたよね？——ぼくが、きみに苦痛を与えるようなことは二度とするつもりはないって、固く決意していること。

コンスタンス それができなかったのよ。あの人、とつても急いでいるようで、自分の言いたいことだけ言って帰ったわ。

ジョン ほんと？ コンスタンス、きみだって、妻としての名誉があるんだから、ぼくが虚仮こけにされるのは嫌いやだろう？ そんな場合、妻だったら、普通〃あら、奇妙ね。偶然の一致かしら。ほんの三十分前に、夫もあなたとは二度とお目に掛かりたくないって言ってましたわ〃とか何とか言ってくれたと思うんだが。でも、きみはもうぼくのことをこれっぽっちも気にかけていないから。それは明らかだ。

コンスタンス あら、そんなことないわ。わたし、あなたが大好きよ。それはこれからもずっと変わらないと思う。不倫はするかもしれないけど、わたし、コンスタントなの。首尾一貫してるのよ。そこがわたしの一番の魅力だと思うんだけど。

ベントリーがドアを開ける。

ジョン (苛々いらいらして) 何だ？

ベントリー タクシーが待っていることをお忘れになったのではないかと……。

ジョン うるさい、下がってる。

ベントリー かしこまりました。(退場。)

コンスタンス どうしてそんなに辛くあたるの？ まあ、タクシー代はバーナードが払ってくれるからどっちでもいいけど……。さあ、もう行かなくっちゃ。あんまりぐずぐずしていると、わたしが来ないんじゃないかって心配するから。じゃあ、さよなら、あなた。わたしの留守中うまくやってね。新しいコックさんは手綱たづなを絞めすぎると嫌がるから気を付けて。自由にやらせとけば、問題ないわ。ねえ、さよならは言ってくれないの？

ジョン 勝手にしろだ。

コンスタンス 分かった。じゃあ、六週間したら戻るわね。

ジョン 戻る？ どこに？

コンスタンス ここに。

ジョン ここに？ ここにだって？ ぼくがきみを入れてやると思うのか？

コンスタンス どうして？ ちょっと考えれば、わたしを非難する理由なんて何にもないことが解るはずよ。だって、わたし、何かあなたの欲しいものを取ろうっていうんじゃないんですもの。

ジョン 離婚することだってできるんだ。

コンスタンス そのとおりのよ。でも、わたしは慎重に相手を選んで結婚したの。あなたが紳士だって判ってるから結婚したの。あなたはわたしを追い出すような人じゃない、——あなたと同じこと

をしたからって。

ジョン そうだな、ぼくにはできないだろうな。最悪の敵とはいえ、あいつをきみと結婚する破目に追い込んだりや気の毒だ。ぼくのような酷い目に合わないとも限らないし……。

コンスタンス (ドアの所で) じゃあ、戻っていいのね。

ジョン (暫し躊躇った後) きみはまったく、頭に来るほど我儘で、頑固で、気まぐれで、……楽しくって、魅力的な女性だよ。きみを妻にした男は永遠に呪われるね。いいよ、くそ忌々しいけど、戻ってきてくれ。

コンスタンスは軽やかに投げキスをし、ドアを勢いよく閉めて出てゆく。

【幕】

注

(注1) 21ページ トロイのヘレン。(ギリシャ神話)ゼウスとレダの子。絶世の美女でトロイ戦争の切っ掛けとなる。

(注2) 25ページ 七つの美德とは Chastity, Temperance, Charity, Diligence, Forgiveness, Kindness,

Humility をいう。(このほか、七つの悪徳は Lust, Gluttony, Greed, Sloth, Wrath, Envy, Pride)

(注3) 32ページ 旧約聖書「民数記」16の32

(注4) 34ページ 旧約聖書「箴言」15の1

(注5) 53ページ 新約聖書「ヨハネによる福音書」4の11

(注6) 68ページ ピアポント・モルガン(一八三七—一九一三)アメリカの富豪。芸術品の蒐集家。

(注7) 109ページ シェイクスピア『リア王』第3幕第2場

(注8) 117ページ Bradda Field *Bride of Glory: The Emma Hamilton Trilogy - Book One* の第14章からか？

日本ではあまり知られていないことだが、サマセット・モームは、欧米では、小説家として名高いのと同じくらい劇作家としても名高い。それは、三島由紀夫や安部公房が小説のかたわら幾つかの傑作戯曲を残したという以上のものであって、その存在感は、井上ひさしに近いといったらお解りいただけるだろうか。(ただし、社会にコミットしようという意識は井上ひさしほど強くはない。)

モームが全部で幾つの戯曲を書いたのか、浅学にして知らないが、活字として残されたものは二十五篇ほどで、そのうちの十八篇は選集に入っている。またペーパーバック版には九篇が取り上げられていて、現在でも容易に読むことができる。活字として残された最初の劇『A Man of Honour』はイブセン流の生真面目な問題劇だったが、次の『Lady Frederick』から『The Constant Wife』までの約二十篇はすべて商業演劇のための作品で、そのうちの十五篇は喜劇 (comedy) あるいは笑劇 (farce) である。そして、一九二七年モーム五十四歳の時に出版された(初演は前年二六年十一月)『The Constant Wife』はその最後に位置するから、モームが商業演劇の台本家・喜劇作家としての経験と技巧の全てを注ぎ込んだ作品と言えよう。(この作品のあと彼は「商業演劇からは足を洗う、これからは書きたいものを書く」と宣言する。そうして書かれた最後の四篇のうち『The Breadwinner』は「一応「喜劇」と名付けられているものの、喜劇と呼ぶのは躊躇われる、苦い内容のものである。)

モームは社会にコミットしようとする気持があまり強くないと言ったが、無いと言ったわけではない。それは最後の四つの劇をお読みいただければ解ってもらえることなのだが、それ以前の作品の中にも、社会にコミットしようとしたものもあって、例えば『Our Betters』だとか『The Land of Promise』を挙げることができる。そしてこの『The Constant Wife』では、なんと、当時のフェミニズム運動(主に男女平等と婦人参政権の獲得を目指したもの)を切り取っているばかりか、遙かに時を超えて、一九六〇年代後半から現在にまで続く第二次フェミニズム運動(女性の経済的自立、性の解放)をも先取りしている。女性嫌い、女性蔑視の人と言われることの多いモームが、である。

しかし『The Constant Wife』は決してフェミニズムを声高に叫ぶアジェンションのための劇ではない。モームはあくまでも観客を愉しませようというサービス精神を優先させている。『The Summing Up』の中で彼は、劇場に足を運ぶ人達を評して「彼等の知的能力は最も知的な人たちのそれよりかなり劣る。仮に人の知的能力を、最も知的な人のそれをA、全く知的とは言えないヒステリックな店員のそれをZとして、アルファベット順に段階をつけるなら、芝居の観客の知的能力はOの辺りに位置するだろう(三十六章)」と述べている。人々が劇場に足を運ぶのは夢を見たいからであって、高級な文学を求めてではない。本作の中でバーバラ・フォーセットは「仕事の疲れを癒すんなら、ミュージカルか、トランプ」と語るが、「ミュージカル」を「商業演劇」と置き換えても差し支えなからう。明日の朝にはまた忙しい日常が始まることを私達は知っている。だからそれまで暫しの間ぐらい、別世界に遊び、日頃の疲れた神経を癒やしたいのである。勿論『The Constant Wife』に描かれたフェミニズムについて論じたい人は論じてくださって結構なのだが、そんなことは面倒だという人は、虚心にこの作品を楽しみ、笑ってくださいればよい。観客を楽しませ笑わすこと、それが喜劇の役目なのだから。

能書きが長くなった。最近(二〇〇九年)出版された本で、モームの評伝としてとても優れている

と感じた。Selina Hastings 著 *The Secret Lives of Somerset Maugham* から初演の様子を引いてみよう。
The Constant Wife の初演は一九二六年十一月一日、アメリカ、オハイオ州クリーブランド、主人公を演じたのは二十年前に『フレデリック夫人』を演じて以来久しぶりにモーム劇を演じるエセル・バリモア。この公演はトライアウトといって、本公演前の試験的な公演だったのだが、結果はさんざんだった。バリモアが緊張のあまり頻繁に台詞を忘れるので、舞台上の大道具の後ろに隠れた演出助手が小声で台詞を教えてやらなければならなかったからだ。客席にいたモームは「苦痛にさいなまれた」と後にその演出助手に語っている。「最後のカーテンが降りて私（モーム）は舞台上上がった。エセルは両腕を私の首に回して両頬にキスすると、『ごめんなさい、あなたの劇を台無しにしちゃった。でも心配しないで、これはロングランになる劇よ、二年はいけるわ』と言った。そして、事実そうなった。」（前掲書三二三頁からの自由な意訳）

ついでに、Hastings 女史は、モームはこの作品で一九一六年に結婚し二九年に離婚した Syrie との「ひどい喧嘩の様子を生き活きと描いている」（同三〇三頁）、「この作品に煮えたぎっているのは Syrie との結婚生活に伴う不公平感、束縛感だ」（同三二二頁）と述べているが、私にはよく判らない。コンスタンスが室内装飾で生計を立てるといふ点では、確かに Syrie をモデルにしたのだろう。が、その筆致は決して苦々しいものではなく、むしろ彼女の生き方を愛情を持って肯定的に描いているように思える。（二人の結婚生活の苦々しさが生き活きと描かれているのは、*Breadwinner* だろう。）

ニューヨークのマクシオン・エリオット劇場で一九二六年十一月二十九日に始まった本公演は二百九十五回を数え、その後一年間アメリカ各地を巡る。イギリスでの初演は翌二七年四月六日、ロンドンのストランド劇場、フェイ・コンプトンがコンスタンスを演じた。但しこちらの公演回数は七十回と少ない。フェミニズムに対する当時の米英それぞれの国民の感じ方に違いがあったのか、それとも俳優たちに問題があったのか。モームは Heinemann 社の戯曲選集第三巻の序文で次のように述べている。

『コンスタント・ワイフ』はロンドンでは失敗だった。アメリカでも、その他の国々でも、或いは今でも時々上演されるイギリスの地方都市でさえも成功だったのだが。（……中略……）元々演劇の善し悪しは、台本と、演技と、観客という三つの要素によって決まるのであって、そのうちのどれか一つでもうまくなければ、全てが台無しになってしまうからだ。（xix）

二九年にはパラマウントがこの戯曲を *Charming Sinners* の題名で映画化した。その後、三七年、四六年、六五年（この時の主演は、あのイングリット・バーグマン）と何度かの再公演が行なわれてきた。今年二〇一六年にも、ロンドンのアーチウェイ劇場で上演されている。

なお、日本初演は、どうやら一九九〇年秋、「UK 90 英国祭」の一環として、俳優座が行なったものらしい。それを教えて下さったのは日本モーム協会会員の丹沢栄一氏である。私が拙訳をお送りすると、氏は、そういうことならと、その時のパンフレットと公演台本をコピーして送って下さった。本邦初演ゆえ、これ（志賀佳代子・アルベレイ信子訳）が本邦初訳ということになるのだろう。すでに私の翻訳作業は終わっていたからこの台本が私の訳文に影響を与えることは殆どなかったが、感じることはいくつかあった。それについては Cap Ferrat で詳しく述べたので今は次のことだけにする。この志賀氏・アルベレイ氏の翻訳はあくまで公演台本であって、完訳ではないということ。（なお、二

○〇八年の公演も両氏の翻訳となっているから、一九九〇年のものとそう大きく変わっていないものと想像される。)したがって、私のこの翻訳が『コンスタント・ワイフ』の日本における最初の完訳になるのではないかと思う。

最後に、この劇の題名についてだが、原題は *The Constant Wife*。形容詞 *constant* が主人公の名前 *Constance* と掛詞になっていることはすぐにお解りだろう。しかしこの形容詞を日本語に移し替えるようにすると、これがとても難しいのだ。だからといって『コンスタント・ワイフ』だけで済ませるのも悔しい。行方昭夫氏は翻訳『サミング・アップ』の中で『貞淑な妻』と訳しておられるが、私には何か物足りなかった。古臭い感じがするし、皮肉っぽいニュアンスが伝わってこないのだ(勿論ストーリーが進むにつれてこの「貞淑」の意味は判るのだが)。そこで無い知恵を絞って「良妻に徹すれば」と副題を付けてみた次第だが、如何だろう。

翻訳に当たっては例によって石川芳恵先生の御助力を仰いだ。また巻島泰山先生(栃木県出身)が私の訳文に静岡弁が交じっていることを指摘してくださったお蔭で標準的な日本語に直すことができた。この場を借りてお二方にお礼申し上げます。

二〇一六年春